



Title	映画「四谷怪談」見たまま番外編二本
Author(s)	高本, 教之
Citation	人文学報 表象文化論(461): 1-52
Issue Date	2012-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10748/5348">http://hdl.handle.net/10748/5348</a>
Rights	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

首都大学東京

<http://www.tmu.ac.jp/>

## 映画「四谷怪談」 見たまま番外編二本

高本教之

四世鶴屋南北『東海道四谷怪談』（二八二五年初演）を原作もしくは原案とする映画は劇場公開されたものだけで戦後八本ある。そのうち六本についてはすでに見た<sup>1)</sup>。今回取り上げるのは、残りの二本。木下恵介監督『新釈・四谷怪談』と蛭川幸雄監督『魔性の夏―四谷怪談・より』。ともに番外版というべきものである。映画化にあたって原作がどのように処理されるか、具体的に場割、セリフ、役柄、事件、小道具など、どれをイキにし、どこをカットするか、あるいはいかなる改変をほどこしたり、オリジナル・シーンをこしらえたりするか、それを映画「見たまま」風に記録するという作業が本稿でも継続される。もともとが、現行の歌舞伎の上演形態に対する筆者の疑義からはじまり、改善への提言として、また原作の解釈への一助として、映画版を参考例にすることを企図したもので、タイトルに「新釈」、「四谷怪談・より」とあるこの二作は後回しにするほかなかった。が、その作業に完度を持たせるためには、やはり資料は少ないより多いほうがよく、それは資料となる作品自体の芸術的価値にも優先されねばならない。なんとなればすでに取り上げた六本とこれから見る二本はともにライブラリの資料検索画面では同じような顔をして並んでいるわけで、だから、「すごい」、「すばらしい」と感動するものと、「時間と金を返せ！」といったくなるものも、筆者の好悪を超えたところで同列に、かつ同じ手続きで見なければならぬ。この二本分を見終えてようやく対照表も完結することになるわけだ。

(1) 高本教之『四谷怪談覚書―その上演形態と映画版をめぐる』(Phrases 1) 首都大学東京大学院・人文科学研究科・表象文化論分野、二〇一一年一月。一一七―一二八ページ)において一本、および高本教之『五つの「四谷怪談」映画見たまま』(人文科学報 446号)首都大学東京・都市教養学部・人文社会系・表象文化論、二〇一一年三月。一一七〇ページ)において五本の「見たまま」を書いている。

とくに次のような点に着目して「見たまま」を記述していく。一、配役と場割、二、事件とモチーフの処理、三、とくに伊右衛門ら主要登場人物の造形。その三点をそれぞれ、一については歌舞伎の上演記録の形にならって図示。二は本文中と図表（巻末）で紹介。三は本文中で解説していくが、とくに原作にない登場人物像や、映画における完全にオリジナルのシーンやセリフは本文中で太字強調する。なお、本稿の主眼はあくまで脚本の処理、原作との比較の方にあり、映像分析でないことをお断りしておく。二本のうち改変度が低く、原作に近い方から見ていく。

一、おみかもの愚連隊の末路はたいていこんなもの——改変を「アレンジ商売にする」監督による閑人対象の噴飯ムービー… 蜷川幸雄監督・内田栄一脚本『魔性の夏—四谷怪談・より』（松竹、一九八二）

萩原健一	関根恵子	石橋蓮司	阿藤海	勝野洋	夏目雅子	森下愛子	小倉一郎
伊右衛門	お岩	直助	小平	与茂七	お袖	お梅	宅悦

冒頭、地面に三つの首が立っている。生首かと思うと日の出とともに、そのうちの一つがあくびして目を開く。ほかの首も目を開き唾をかけたたりしてふざけ合う。場所は「海岸」（以下、原作にないオリジナル・シーンは大文字強調する）、どうやら仲間同士浜辺で遊んでいただけとわかる。海辺には伊右衛門と赤子を抱いたお岩。伊右衛門は釣竿を手に、尻つばしよりで水に入って釣り糸をおろす。お岩を見てほほえむと、お岩もにっこり笑い返す。BGMにはパッハの「主よ、人の望みの喜びよ」（これがメインテーマで、以後何度も流れる）。チャンバラをして遊ぶ者、泳ぐ者がいる。すべてが伊右衛門の仲間たち。宅悦は女郎衆を連れている。伊右衛門の竿にあたりがある。と、慌

ててお岩を呼び「はやくとつてくれ」と魚をまかせろ。お岩が釣針から魚を取る。背景に直助が走って来るのが見える。伊右衛門「釣りは好きだが、魚の鱗はきらいだ。エサ取ってくれ」——お岩「手間のかかるお人ですねえ」。そこへ息せき切つてようやくたどりついた直助が「与茂七がいる。狐か狸がとりついたような顔している」という。伊右衛門が「よし、案内しろ」と皆とともに走り出す。卒塔婆の積み重なった空き地（昔の寺か神社か？）で与茂七は一心不乱に刀を振り回す。剣術の稽古らしい。その白刃の下へ伊右衛門が走り込む。間一髪で刀は止まり、与茂七「あぶない」と一喝。伊右衛門はニヤツと笑う。与茂七は驚いた表情。伊右衛門が「袖が寂しがつている、家へ帰つてやれ」、お岩も「妹のところへ帰つてやってください」。与茂七は「あだ討ちはやる。かたきは討つ。家へ帰れだど。(……)捨てたよ。おれはぜんぶ捨てたよ」と叫び、去る。寺（神社？）のお堂のかけから侍二人が出て来て、与茂七に付き従う。以上、冒頭シーンはすべてオリジナル。いかにも奇を衒つたオーブニングという印象。

次に「浅草額堂」。芝居が立ち賑わう往来の中、伊右衛門の仲間たちが「宅悦は女房（赤座美代子）孝行だ」などとからかつている。宅悦の方は「直助も好きだな」。その視線の先には芝居茶屋があり、そこで働くお袖に直助がしつこく声をかけている。お袖は迷惑がつている。直助「与茂七はもう帰つてこないよ。……わしは、やさしいから」とまとわりつく。直助とお袖の関係は原作と同じ。ただし、与茂七がかたき討ちのために女房のお袖を捨てるという点、またそうした事情を直助がすべて知つていゝというのは改変。続いて、茶屋に伊藤喜兵衛、お梅、医者様の尾扇とお弓（か、乳母か？）が腰をおろし、行き交う男たちの品定めをしている。尾扇「ほら、いい男よ、お嬢様」と言うが、お梅は気に入らないのか、手にして毬を苛立たしげに床に叩き付ける。喜兵衛（内藤武敏）は心配そうな顔。往来にとつぜん喧騒が起こる。伊右衛門の仲間たちが四谷左門（鈴木瑞穂）を取り囲み、浅草一帯はおれたちの縄張りだ、ここで物乞いされちゃ困るんだと脅しつけている。彼らはヤクザなのか乞食なのか？ もとより堅気の風体ではない。しかし、冒頭シーンで伊右衛門の仲間だと観客は知つているので、これも伊右衛門の仕込みだとわかる。左門は「娘のお袖に金を借りに来た(……)わしは元浅野家の家臣、四谷左門だ」と言う。その様子を離れたところから笑みを浮かべて伊右衛門が見ている。その伊右衛門を茶屋の座敷からお梅が見つけ、う

つとりとした表情で表へ出る。伊右衛門は「やめろよ」と喧騒の中に割って入り、懐から札入れを出して銭をばらまく。その金を拾って仲間たちは去っていく。

助けられた左門はしかし、顔をあげると「伊右衛門、貴様」と怒っている。「助けてもらって貴様はないでしょう、父上」という伊右衛門に対し、左門は「岩を返せ」。ここは原作からの改変で、立場が逆転している。現在の伊右衛門は岩とともに住んでるので、この場で伊右衛門が「お岩を返してほしい」というのはなくなるわけだが、それを省略するのでなく、イキにする形で逆転させている。先に見たものでは「邪魔だから、岩を引き取ってくれ」というリアリスティックな悪党の佐藤慶・伊右衛門（森一生監督作）という例もあったが、それとも異なる改変。

左門に対し伊右衛門は、お岩を返したら出戻りになる、可愛い娘に傷がつく、そんなこととしていいのですか、と世間体を大事にせよとも言いたいのか、よくわからない理屈を捏ねる。左門は「ドロボウ。藩の金を盗んだことを知っている」とこれは原作に則ったことを言い、続けて「そのために二人も首をくくって死んでいる」（ママ、「首をくくる侍！」。サムライの不始末の責任は「首をくくる」でなく「腹を切る」だろう）と言う。これはオリジナル。

伊右「潰れた藩の話はしないでほしい」——左門「全部（カネを）返せ」——伊右「もらったものはもらったもの。それに今父上を助けるために使ったじゃないですか」——左門「もつとある」——伊右「お金は潰れた藩の配分金です。盗んだ証拠があれば見せてください」と、左門は伊右衛門の顔を唾を吐きつける。目に入ったのか、それだけでなくのだらうが、伊右衛門は両目をつぶり悔しそうな表情。その後一瞬、伊右衛門の仲間たちがさきに伊右衛門がばらまいた金の分け前を配分する場が映り、カメラは戻って、伊右衛門が悄然として立ち去る姿を映す。

ちよつとここで立ち止まって考えてみたい。ヤクザ者からまれた左門を伊右衛門が救うのは原作通り。またそれがじつは金を握らせての伊右衛門の仕込みであるというのも現行の歌舞伎舞台でもあるやり方である。だが、それは伊右衛門が「お岩を返してほしい」と左門に頼むためで、そのために恩を売る狙いであった。この映画では、しかし、その立場が逆転しているのです、そのお願い自体がありえない。となると、いったい伊右衛門はなんのためにいったん左門を窮地に陥れてそれを救い出すという茶番をやるのだらうか？ そこがわからない。義理の父親と

仲良くやりたいということだろうか。だとしたら、それはなんのために。また、唾を吐きかけられたあと、なぜしよげたような表情をしているのか。それも、この場ではまだよくわからない。

解決は後の場面に譲るとして、映画に戻ろう。伊右衛門が悄然と立ち去る姿をお梅が見つめる。伊藤喜兵衛が「あれはたしか隣の小さな家に住む、浅野の浪人者だぞ」——尾扇「旦那の敵方だ」——喜兵衛「連中の敵はわしの吉良殿だから」と、それ自体かなり不自然な説明調のセリフのやりとりから、忠臣蔵世界との繋がりを残していることがわかる。また「高師直」ではなく「吉良」と名称は実録風にしてある。「それなら話は簡単」、金で片が付くと尾扇が請け合う。ちなみに、原作では脇役の中でも目立たないこの尾扇（石丸謙二郎）は、ここでは化粧・話し方からいかにもな雰囲気、話の間じゅう喜兵衛の手を握っている。喜兵衛は男色、厳密にはお梅の父親（祖父ではない！）であるから両刀使いという設定らしい。その横のお梅は伊右衛門のことで頭がいっぱいのように、「もう、はやくつかまえて」と金持ちわがまま娘の典型といった演技。

場面変わって「伊右衛門宅」。伊右衛門は風を作っている。「傘」、「提灯」とはあえて変えて、内職仕事に工夫がある。その横でチンピラ仲間が飯を食っている。お岩が膳に飯を盛って声をかける、「いえもん」と名前を呼び捨てにし、「飯の支度ができました」——伊右「おかずは」——お岩「たくあん」——伊右「おまえも一緒にここで食べないか」。時代劇としては一風変わった会話だが、おかずが「沢庵」で（貧乏を象徴する品ということだろうか？だが、膳にはほかに青菜に煮干し（か、シシャモ？）もついているから、普通「おかずは？」と聞かれたらメインの魚の方を言うような気もするが）、それに「一緒に食べないか」とは同じ南北の『盟三五大切』の薩摩源五兵衛・小万のパロディーのつもりか？しかし、ならばメシは白飯でなく茶漬でなければならぬ。そうした意図があったかいなかは不明だが、いずれにしろパロディーとして不発で、ギャグとしても不成立。「ちそうさまでした」と仲間たちが挨拶する。伊右衛門「今日はゆっくりしていけよ」と、まるでこのチンピラ達の見貫分のようにふるまっている。しかし、いったい、どうやって食わしているのだろうか。どうやら奪い取った浅野家御用金の貯えがあるということらしい。しかし、ならば風作りという内職はなんのためか？趣味か？

差し向かいで飯を食うお岩と伊右衛門。ここからまたバッハのBGM。伊右衛門「おまえいくつになる。二十二か、三か？」——岩「もうおばあさんだから」——伊右衛門（口に飯を含みながら）「おれは子どもの頃ほんとうに凧あげが下手だった」——岩「ほんとに不器用なんですね」——伊右「俺じゃ、あがらん。釣りも下手だし、凧あげも下手だ。時々あげにいくが、もう諦めた」——岩「あたし、あげてみようかしら」——伊右衛門（怒った表情で）「余計なことするな」と巻き舌で言い、茶碗を渡しお代わりを催促する。お岩が茶碗に飯を盛るとき少しこぼれたのか、伊右衛門がつまんで口に入れる。お岩「あ、すいません」。以上、完全なオリジナル。凧あげと釣りが下手でもそれが生業でないなら生活に差し障ることもないだろうからなら問題ないように思われ、また、そういうどうでもいいことを晩飯の話題にできるのはよほど仲睦まじい夫婦であるのを強調しようとの意図かとも思うが、ここではよくわからない。むしろ単に伊右衛門が自分の不器用というキャラを自分で説明したことらしい。となると、自分のキャラクターを自分で説明する伊右衛門、映画版でも堂々の初登場である。※（以下、この※印は映画として、かつ原作の処理として奇異の感を抱かざるを得ない部分に付す）

同じ場面が続き、伊右衛門が「今日おまえの親父にあつた」と話題を変える。「袖も金をしぶりだしている。与茂七がいなくなつてから、その隙を狙つて、三日にあげずに行つていらしい」——お岩「あだ討ちつてそんなにお金がかかるのでしょうか？」——伊右「おれにはわからねえ。あの人の場合は口先だけだ。あだ討ちをいいことに袖の（ママ、「お袖に」の間違いだらう）小遣いをせびつている。小遣いならいざ知らず、暮らしの金だからな。あだ討ちを商売にしてる」——岩「そんな」——伊右「侍しか漬しのきかない人だ。あだ討ちをやる気もないのに、あだ討ちを生き甲斐にしている。本当にこの家に近づかなければいいがな」——お岩「えっ」——伊右「あの人のために俺の暮らしをめちゃくちゃにされたくないんだ。これ以上手を突っ込んでくるようであれば、サムライ対サムライだ」——岩「どういふことでしょうか？」——伊右「おまえを守る」。蚊帳の中の赤子が泣きはじめる。お岩は中に入って抱き上げる。と、伊右「じつは今日おまえの親父に呼び出しを受けた。配分金を全部おまえに持たせて、いつおまえの親父に返すかということだ」——岩「えっ」——伊右「おまえの父上が正面からおれに斬りかかってきたと、

「そう受け取つていいだろう」。この説明によつてようやく伊右衛門が左門と別れた後になぜああまで悄然としていたかわかる。その間お岩は赤ん坊に乳を飲ませるが泣きやまない。伊右「やはり乳の出は良くないか？」——岩「どうしてでしょうね」と蚊帳を出ると風が躡く。伊右衛門「気をつける」。お岩は赤子を抱いてそこを立ち去る。ここでBGMが終わり、赤ん坊の泣き声と蟬の声。ひとり残った伊右衛門、自分の作つた風を手にとり、振り返つて家の裏手に目をやると、そこには城のような立派な建物。風を投げ捨て、また飯を食おうとするが、手を止め、お櫃の中に茶碗の飯を叩きこむ。以上も完全なオリジナル。※

それにしても、「めちやくちやにされたくない」というほどまともな暮らし向きなのか？ また「おまえを守る」とお岩に言う伊右衛門というのも新しいキャラクター。自分の暮らしと妻を守る伊右衛門、これも初登場。また、茶碗を叩き割るでもなく、メシをぶちまけるでもなく、お櫃の中に茶碗の残飯を叩き入れるという、それ自体きわめてせこい一瞬の怒りの表現を見せて興味深いが、その怒りは一体なにに対するものなのか、よくわからない。

「庭」でお岩は「たかいたかい」と赤ん坊をあやしている。庭を覗き込む娘がいる。お梅である。オレンジ色のド派手な振袖のお梅が庭に入つて来ると、やにわに地面の石を拾い。お岩に向かつて投げつける。赤子が泣きはじめる。さらに砂利を投げつけ、逃げ去る。これだけ強烈なお梅は見たことがない。「色情狂的処女」という落合清彦の名言があるが、まさに色情狂の「狂」の部分が強調された感じ。

場面は変わつて「橋」の上。伊右衛門が町娘に風を渡す。娘は「ちよつと風が強いみたい」——伊右「あしたでいいよ。おれはこれから仕事がある」と立ち去る。これもオリジナル。では風は売り物でないのか？ ※

場面は「伊右衛門宅」。赤ん坊を抱いたお岩が「いえもん」と、それ以外の会話はほぼ敬語で武家の女房らしいのに、そこだけ現代風を装つてか相変わらず呼び捨てに（ま、苗字を呼び捨てよりはマシか）伊右衛門を探す。家の中ではチンピラ仲間が花札をしている。お岩は不安そうな表情。以上、オリジナル。

場面変わつて夜のまちを伊右衛門の仲間たちと直助が歩き、「宅悦内」に着く。直助がお袖のいる一間に入る。そこは原作通り。お袖「どこ触つてもいい、どこでも触つてあげる。でも全部は寝てあげない。そういう約束でここ



に働きてきている」とかなりあけすけに現代語訳した感じだが、ここは原作をイキにしている。「この店をやめて、芝居茶屋もやめてわしの嫁になってくれなんて、そんなあ」と直助のお願いをお袖が鼻で笑うと、直助「与茂七はもう帰つてこないんだし」。お袖はそれを聞いて怒り、その一間を出ようとする。このお袖はかなり気が強いという設定。直助はさらに、侍つていうのは返り討ちにあつたりで死んでしまふんだから、と言いつけて、甘い声で抱き上げる。そのあいだもお袖は顔にピンタを食らわせ続けているが、表口に二人を見る侍がいる。侍は与茂七にも見える。直助・お袖と目があつたようで、侍はすぐに立ち去る。お袖は「あつ、ダンナあ（ママ、妻が夫のことをそう呼ぶか?）」と言つと、直助は「何を言つてるんだよ。何でもないよ」と誤魔化そうとして、そのあとすぐにその侍を追つて外へ飛び出す。お袖も外へ出るが、直助は突き飛ばして、走り出す。ここは原作の客として三人が鉢合わせする場面の改変。

場面変わつて、同じ日の同じ頃。冒頭シーンで与茂七が刀を振り回していた卒塔婆が積み重なる元寺。これが「裏田圃」場面にあたる。伊右衛門と左門が二人。左門「岩を返せないし、盗んだ金も返せない? それじゃあ、おまえ、わしの面倒をずーつと見るか」——伊右「やつぱりそうか? 芝居茶屋だけじゃ飽きたらねえで、袖をあんな下卑た場所につとめさせたのも、てめえの仕業だろう。それが親のすることか?」——左門「軍資金だ」——伊右「それは聞き飽きた」——左門「浅野様（ママ、自分の主君を同輩に対して「……さま」と呼ぶか? 役者の方も時代劇を経験したことがあるなら、このセリフはおかしいと言わなければいけない。普通は「殿」、「亡君」あたりだろう）の家のくせに、あだ討ちに加わらないとはどういうことだ?」——伊右「てめえだつて俺たちのヒモじゃねえか?」——左門「なにい」——伊右「ドロボウ。浅野だ、かたき討ちだと御大層なお題目並べやがつて、今度はおれのうちを丸ごと盗もうと思つてるんだろう。てめえまで面倒見ていたら、こつちが破産してしまう。おれには関係ねえんだ。てめえはひとり物売り（ママ、「物乞い」の間違いか?）でもやつてる」。左門はさすがに腹が立つたと見え、刀を抜く。伊右衛門「侍はやめている」と立ち去ろうとすると左門は再三「待て」と立ちはだかり、「素直に金を返せないのなら、かくかくしかじか大泥棒ですと、番所に教えてやる。いくら潰れた藩とは言つても上役は上役だ

ぞ、おまえの。上役同士のつながりがある番所の連中なんか、わしの目の色ひとつでどうにでもなるんだから」と、これまた日本語として、時代考証として、また左門の立場として、いろんな意味で理解不能なセリフの脅迫に続けて「お上がいい加減だってことは、お前だつて知っているだろう。ハハハハハハ。わしがお上だ。訴えて島流しにしてやる。年寄りを粗末にした罰だ」と、良くわからない理屈を言つて立ち去ろうとする。と、今度は伊右衛門が「待て」と立ちふさがり、「てめえはきたねえ、きたねえ」と歯ぎしりのあいだから出てくるような怒りのセリフを吐く。左門「じゃあ、わしの言う通りにするか」と非論理的に応酬すると、伊右衛門は刀を抜き一刀のもとに斬り捨てる。すると、その場へ侍とそれを追う直助があらわれる。直助は後ろから侍に斬りつけ、「与茂七、死ねえ」と止めを刺す。それから人の気配を感じ一瞬うろたえたと、「直助」と呼びかけられる。直助は「伊右衛門」とこれも呼び捨てで応じ、倒れている左門を見つめる。伊右衛門「ちょうど揃った人殺しか」とこれは原作の裏田圃をイキにしている。が、ここからが異なる。伊右衛門が、直助が殺した相手を確認すると与茂七でないとわかる。二人がともに慌てるどころにさらに人が来る。死体を隠す。あらわれたのはお岩。伊右衛門が「岩、遅かった。父上は俺の目の前で敵の回し者に殺された。与茂七もいっしょにだ。言葉たくみにおびき出され、はかられた。間に合わなかった。かたき討ちのことで話し合っていたんだ。そこをばっさりだ」とこの伊右衛門にしてはすいぶん機転が利く。そのアイデアに合わせるように、直助が隠してある死骸の顔の皮を剥ぎとる。直助はびくびくとさらに吐き気を催しながら、それをする。「助太刀できなかつた。いい父上だつた」と伊右衛門のアドリブは続く。そこへ、さらに「姉さん」とお袖があらわれる。と、直助がわざとらしく驚いて「お袖、与茂七もやられてるぞ」。お袖は見ても悲鳴をあげず。直助は「間に合わなかつた。ここに来たらやられていた」と言う。泣くお岩とお袖、なんとかその場を切り抜けたと顔を見合わせる伊右衛門と直助。四人が同じ場に居合わせるのには原作通り。しかし、お袖の方は直助とともに与茂七を追ってきたというところでわかるとしても、なぜこの場にお岩まであらわれたのだろうか？ 原作では、お岩は辻立ちをしていることになっている。そこから家に帰るには浅草裏田圃を通ることになる。左門も浅草からの帰り道だから、そこを通るのも不思議はない。原作の南北の方はそこにきちんと説明をつけている。それがこの

映画にはない。伊右衛門に「呼び出し」をかけた左門は「額堂」からの帰り道ではないのだ。つまり、この場面は、歌舞伎原作以上に、歌舞伎的ご都合主義に甘えているということになる。見せ場作りというわけだ。※

さて、その後四人は海辺の浜に腰を下ろす。伊右衛門は「少しは落ち着いたか？」と二人を気遣う。そこで、またバツハのBGM。四人は歩き出す。お岩は伊右衛門の肩に抱きつき「いえもん」と、伊右衛門「わかっている。父上のかたきはきつととる。必ず探す」。お袖が直助に「あんたあ」と、直助「わかっている。ダンナのかたきはきつと討つ。顔だつてちゃんと見たんだし」——伊右「おまえ、顔をはつきり見たな」——直助（伊右衛門に）「おう、はつきり見た」。さらにお袖の手を取り「なあお袖、いっしよに暮らそう。なあなあ」——伊右「そうしろ、袖、一人でかたきを探すより、二人で探したほうがいいだろう。あんな下卑た店はやめて。おまえの家は深川だ。いっしよになれ。それが与茂七のためだ」。直助は、前を歩く伊右衛門の隣に立ち耳打ちして「ほんとうのこと言っちゃまった方がいんじゃないか」——伊右「バカか？ おれにまかせておけ。胸を張れ、胸を。堂々としている」と二人が歩き続けると、「うわあつ」と砂浜に掘られた落とし穴に嵌る。穴にはウナギがいる。二人は慌てる。※

場面変わって「伊藤邸」。縁側で乳母が夏ミカンを食っている。と、「いつになったらあの人といっしよになれるのよ」というお梅の叫び声。「私もう待てないのよ。今日こそ隣のお岩さんを殺してきます」と懐剣を振り回す。喜兵衛が取り押さえて、「刀で殺さないで、金で殺そう」。※

場面変わって「伊右衛門宅」。お岩が仏壇に線香をあげている。宅悦が訪ねてくる。その後にはチンピラ仲間が女郎を連れている。乱痴気騒ぎが始まる。お岩は庭に出る。伊右衛門が泣く赤ん坊をお岩に渡しに庭へ出る。お岩「ひどいじゃないの。お父様が返り討ちにあつて以来することなすこと」——伊右「みんなかたき討ちに力を貸してくれている連中だ」——岩「こんなことまでして」——伊右「それじゃあお前が岡場所につとめて父上のかたきの噂でも耳にしてくるか」と、女郎達が「伊右衛門さまあ」と抱きついてくる。最後に「かたき討ちには金がかかる。ほんとにわかった」。女郎を家にあげての乱痴気騒ぎは仲間をもてなす接待ということか？ それに金がかかるというのか？ この場面も映画のオリジナル。※

場面変わって「三角屋敷」。お袖がそこで仏花を商っているのは原作通り。直助は奥の間で寝ている。お袖「少しは働きに行ってください。何日もごろごろして（……）昼です」と怒る。これは改変。直助はお袖に抱きつき、家の障子を閉める。この二人はすでにできて、これも改変。原作の直助は鰻搔きとして甲斐甲斐しく働き、お袖にはお預けを食っているのだが、そこを完全に逆にしてゐる。※

場面変わって、「尾扇の店」。喜兵衛がいる。尾扇は顔が少しずつ崩れる菓を調査しているという。「死にはしません。でも、女房がひどい顔になりやあ離縁状叩きつけますよ、男なら」。喜兵衛はその菓を取り上げるとやにわに金魚鉢の中に放り込み、様子を見てから「おおつ、良い菓だ」という。金魚の顔が崩れたのか？ 映像からはわからない。おそらくこのセリフは脚本段階では尾扇のセリフを受けてのものだったろうと思う。金魚鉢に菓を入れるのはそのあとでなければおかしい。順序がおかしく、まったくナンセンスな演出。これもオリジナル・シーン。※

「伊右衛門宅」。伊右衛門とお岩は昔を向け喧嘩の様子。「若い人を遊ばせただけじゃないですか」とお岩が言うのと、あれもかたき討ちのためだったが、自分に金がなくなつたのがわかつて、連中はみんな寄りつかなくなつたと答える。それで、お岩に「ほんとうに宅悦のところへ出るか。おまえだつて以前は岡場所に出ていたんだ」と言うのと、お岩は「うわああああ」と泣き出し、声を限りに叫び、床を叩いては、咆哮する。産後の肥立ちが悪く伏せりがちな歌舞伎のお岩では考えられない演技・演出だが、ま、下手な新劇の典型のような暴れ方。すると、伊右衛門「だいじょうぶか？」と大慌てで心配そうに近寄る（ヒステリーはお岩の発作ですか？）。お岩は泣きながら「お父さん、可哀想」。伊右衛門は相変わらず慌てながら「もしかしたら、今日あたりかたきに会えるかもしれない。おまえも念のために刀をもつか？」と、その場のしぎにしてもあまりにもいい加減な事を言いながら、じっさいに押入に向かう（これだけでも鼻で笑えるような展開！）。で、押入を探ると、刀は袋だけ残してもぬけの殻。伊右衛門はさらにうるたえ「ない、民谷家に伝わる刀がない」と叫ぶ。これもオリジナル・シーン。※

場面変わって岡場所の「宅悦内」では、ある一間にたむろする伊右衛門の仲間の一人が刀で壁を削っている。宅悦は「覗かせて、その分、別に金を取る」と言う。伊右衛門が駆け込んでくる。刀を持っている小平を捕まえ、周

りの男たちにしよつ引いてこいと命じる。みな従う。※

場面は一瞬変わって「雨の中」、傘が三つ並ぶのをカメラは上から捉える。

場面変わって「伊右衛門宅」。小平を縄で縛り猿轡を噛ませ、折檻している。といつても頭にキセルの火種を落したりして楽しんでる様子。お岩だけが、いたたまれない表情で無言。そこへ「ごめん下さい」の声。伊右衛門は「隠せ」と指示し、小平を床下に入れさせる。原作の小平が盗もうとしたのは「ソウキセイ」という薬で、入れられるのは押入の中。忠臣蔵の筋を残すなら小平の役柄を用いる方法もあったのではないかとも思うが、この脚本はそうしていない。薬の代わりになるのは同じく民谷の家宝の短刀。しかし、それで岡場所の壁に穴を掘るとは、ちよつとわかりにくい。穴を開けるなら刀より安価な鑿の方が楽だろうし、またその刀を売って金にしようとの目論見ならば、壁など掘って傷つけては元も子もないだろうに。この脚本はそうしたところの詰めが甘いのだ。※

続いて、伊藤家の乳母が前髪を残すお小姓風のこども二人と小者二人を従えあらわれる。お小姓の一人は鯛、一人は紅白饅頭を三方に載せて持つてくる。なんとも大層なご挨拶である。乳母「ほんのお隣に住みながら、お子さまがお生まれになったとは存じませんでした。おめでとうございます。お近づきのしるしもかねて、遅れましたが、ささやかなお祝いを」と、先の祝いの品に加えて角樽を差し出す。伊右衛門とお岩、さらに仲間のチンピラたちも正座し、一同礼。乳母はさらに「よろしければいますぐ、おこし願って改めてご酒など差し上げたい」。伊右衛門はうなづく。乳母は懐から薬包を出し、「当家伝来の乳の出のよくなる薬でございます」、事情は産婆さまから聞いているという。伊右衛門は礼を言う。伊藤家から付け届けがあるのは原作通りだが、それへの対応が少しずつ違う。まずそこでお岩より先に伊右衛門が礼を言うというのが、改変。原作ではお岩のほうが伊右衛門にお礼に訪ねて行くように頼むが、伊右衛門がしがる。それを逆に行っている。伊藤家が高家の家臣であるというのがその理由だったが、この映画の伊右衛門はそんなことを気にしない。次の場面もその調子での改変。

同じ伊右衛門宅の「奥の間」。伊右衛門は「岩、これで吉良への仕官の道が開けてきたぞ」、どんどん出世できると上機嫌。お岩は「でも吉良ならお父様のかたき」——伊右「おまえはわからないのか、おれの考えが。帯だ」と着

付けを手伝わせ、宅悦には「おまえは留守番だ。侍の屋敷らしくな——宅悦「ごきげんですねえ」——伊右「その菓、岩に飲ませてやってくれ」、さらに一同に「行くぞ」と出かける。

「伊藤邸」。壁や障子も金箔貼りの豪華な間に、小判を載せた三方を持つお小姓が登場。うしろにはお梅がいる。お梅は伊右衛門の隣に座り、三方が伊右衛門の前に置かれる。喜兵衛は「支度金です」。驚く伊右衛門に「無理は承知です。承知ですが、あなた様の都合がどうあってもぜひ梅の婿になっていただきたい。わしの娘梅は、いつか芝居茶屋で、無頼の者にいじめられていた老人を見事に助けたあなたに惚れ申した。それ以来ずっと恋焦がれております」——伊右「しかし、それは」と、喜兵衛は突然「勝負！」と叫ぶ。伊右衛門は気圧される。一同も目を瞠る。

喜兵衛は伊右衛門に近寄り耳元で「あなたの奥方に、もう、毒を盛った」。伊右衛門は驚いた表情。ここも内容はほぼ原作通りだが、お梅の思い余つての自害の素振りを省略し、伊右衛門がいったん辞退するセリフを「しかし、それは」だけになっている。また、細かなことを指摘するようだが、喜兵衛の話はこの映画ではじつは筋が通らない。この映画で、お梅が伊右衛門を見初めるのは、無頼の者から左門を救う前のである（本稿、三―四頁）。それをカメラはしっかりと捉えている。逆に言えば、伊右衛門が左門を救うところをお梅が見ているという場面をカメラは捉えていない。そして、そのあと左門と別れ悄然と立ち去る伊右衛門の姿をお梅が見ている（本稿、五頁）のはシーンの繋がりとして理解できる。このあたりのおかしさは編集の間違いだろうか。あるいは撮り方の問題かもしれない。映されているシーンがお梅の主観かどうかがわかりにくい。全体として、誰が何を見ているかということがセリフ抜きではわかりにくいのだ。

場面戻って「伊右衛門宅」。お岩は菓包をありがたそうに広げて、菓を飲みこむ。宅悦が湯呑を差し出す。

場面は変わって、「どこかの遊郭」。花魁風の女もいるから、安手の岡場所とは違う。伊右衛門の一味が、喜兵衛にもらった「支度金」を早速使つてか、どんちゃん騒ぎをしている。伊右衛門が紙を投げると、女郎が奪い合う。

「伊右衛門宅」。伊右衛門が朝帰り。落ち着かない様子。床下から小平が顔を出す。伊右衛門が鞆で叩き、ついで家中の戸や障子を開け放つていく。それからお岩が赤ん坊と寝る蚊帳の中に意を決して入り込み、お岩の顎をつか

まえ、しげしげ顔を見、「まだなんともなつてねえじゃねえか」と独り言をいう。お岩はわけがわからないながらも、不審そうな顔をする。そりやそうだ。明らかにおかしな言動なんだから。ともあれ、顔が変わっていないのを確認するというシーンはこの映画のオリジナル。※

場面変わって岡場所の「宅悦内」。お袖が「また働かせて」と宅悦の女房に相談している。表口で雨に濡れ立ち聞きしていた直助が入ってきて「つとめるのだけはやめてくれ」と言うとお袖は「与茂七のかたきも探さない。働かない。なに、あんたは」とビンタし、「触らせるだけなんだからほつといてよ」。直助は宅悦の女房に向かい凄むように「うちの女房、ここでは働かせないからな」——宅悦女房「直さん、心配なら穴ぼこから覗いていけば」。このシーンもオリジナル。この直助のぐうたらな暮らしぶりはなぜだろう。じつは殺人に対する良心の呵責を抱えているということか？ そうは見えない。ちなみに、そうした感情は原作の直助にはまったくない。あるいは、求めていた女を手に入れた途端にぐうたらになる男を描きたいとでもいうのか？ かりにそうだとすると、そんなものに共感を抱く人間がいったどこにいる、と自問してちよつと身近に思いつく例がない。ともあれ、少なくともこの映画を見て説得されないのでは、なんともしようがない。※

場面変わって「尾扇の店」。伊右衛門が直接「もう少し毒の量を増やしてください」と頼む。尾扇は調査が難しいが、今度のは強烈に効くと請け合う。伊右衛門は喜兵衛に「もうかまわないから、梅さんをひとまずうちへ来させてください」と言う。さらに「それから岩を追い出せばいい」。すべてオリジナル・シーン。※

「伊右衛門宅」。お梅が興入れしてくる。前髪のお小姓が今度は襖を運び込む。喜兵衛はお岩に「ふつつかものです。しばらくおそばにおいてやってください。しばらくのご辛抱。いずれは私の地位をそっくりそのまま、伊右衛門さまに」。伊右衛門がお岩に「わかつているな」——お岩「わかりません」——伊右衛門「全部かたき討ちのためだ。決めたはずだ。何事もうまいく。お岩が無言でいるとうしろからお梅が「いえもん」とこれも呼び捨て。これらもオリジナルだが、よくわからない。お岩が「わかりません」と言うのは当然。何をどう説得すればこういう仕儀に至るのか？ ※

次に「宅悦内」。宅悦女房に言われた通り、直助が隣の様子を探るように壁に耳をつけている。隣の間でお袖の声があると穴から覗いたり手を出したりして、邪魔をする。落語の「お直し」をもじつてものだろうか？ それにしてもあけすけ過ぎる。直助が疲れて横になると、そこでバツハのBGM。仕事を終えたお袖が直助に布団を掛け、添い寝する。※

BGMはそのままに「伊右衛門宅」。お岩が籠の火を起こしている。奥の間では伊右衛門がお梅の膝枕に寝ている。お梅が「尾扇の葉」と伊右衛門に耳打ちする。伊右衛門は立ち上がり、「岩、葉は飲んだか？」と聞き、「赤子のためだ」とその場で葉を飲ませる。お岩は静かに飲む。と伊右衛門は「ここんとこ、うちにこもりつきりだったな。明日は芝居でも見に行くか」。※

「芝居小屋」。伊右衛門を真ん中にしてお岩とお梅の三人が座る。弁当を広げ、お岩が伊右衛門の口に箸で食べ物運ぶ。舞台上では、同じ南北の「かさね」〔法懸松成田利剣〕、一八二三年初演。怪談物にお岩と伊右衛門は肩を寄せて見入る。お梅がやきもちを妬いている。

「芝居茶屋」。三人並ぶが、お梅は二人に背を向けている。伊右衛門、お岩に「疲れたろう。朝早かったし。あのドロドロのあとは筋書通りだと思ふ。なるようになっていくのだろう」。さらに「体はどうだ」とお岩の肩を叩く。お梅が「尾扇の葉」と独り言のように言う。伊右衛門「日の暮れないうちに帰るか」。二人が立ち上がると、お岩がふらつき、顔の右側をおさえて座り込む。伊右衛門は肩を抱いて外へ連れ出し、駕籠にのせる。と、お岩の顔を見たらしい駕籠かき二人が「ぎやあ」と叫んで逃げ出す。伊右衛門は駕籠を締め、野次馬を追い払い、近くにいた宅悦を見つけてうしろの片棒をかっくよう命じ、自分は前に回って駕籠を持ち上げ走り出す。宅悦女房が呆れた顔で見入る。お梅も駕籠に並んで走る。と、駕籠からお梅の足下に鮮血が滴り、お梅の足袋がみるみる赤く染まっていく。

「途中の川べり」で、お梅は足袋を脱いで洗う。宅悦と伊右衛門がくたびれて腰を下ろしている。伊右衛門が宅悦に「岩と寝ろ！ そうすりや岩をきる（縁を「切る」か？ それとも「斬る」か？）ことができる」と言う。このセリフは場所が違うが、内容はほぼ原作通り。二人が振り返ると、お岩がいる。顔の右側の髪が抜け落ち、



目の周りはカサブタができてきているようで、ところどころ血が出ている、「水」と言う。伊右衛門と宅悦が大声をあげ、腰を抜かさんばかり。ただし、その顔を見る限り、お梅の足袋を真つ赤にするほどの出血があったようには見えな  
いし、なによりたいしてひどい崩れ方でもない。この場面もオリジナル。※

場面変わって、いったん「三角屋敷」。お袖が夕餉の用意をしていると、竈が突然爆発する。お袖が悲鳴をあげ、水を汲みに外に出る。と提灯もバックリ口を開けたように割れて燃え出す。この場面もオリジナル。しかし、これではお岩は死ぬ前から化けて出たということか？ ※

すぐに「伊右衛門宅」に戻る。宅悦とともに伊右衛門がお岩を運び込む。家に居た喜兵衛、尾扇はお岩を見て慌てふためく。赤子の鳴き声も響く。そのどさくさの中で伊右衛門は宅悦をつかまえ、刀を見せて「お岩とやれ、やらなきやおまえを斬る」と脅しつける。宅悦はうなづき、怖がりながらもお岩に襲いかかろうとする。伊右衛門は行燈から紙繕りか何かに火を取り、蠟燭に火をともしようとする。それを庭から見上げる娘がいる。いつか風を伊右衛門からもらった娘。前掛けをしているからどこかの商家で奉公しているのだろうか？ この役もオリジナル。娘は立ち去る。※

お岩の悲鳴が響く。宅悦は逃げ出そうとする。と、伊右衛門はその宅悦に抱きついて、「助けてくれ。岩をなんとかしてくれ。礼はなんでもする」と先ほどとは打って変わってお願いする。「礼なんかいらねえ」と宅悦は逃げ回る。逃がさんと組み敷くとお岩が「いえもん」とよろけて近づいてくる。宅悦を伊右衛門がおさえ、その二人をお岩が追うという形で、奥の間の中を走り回る。お岩「いえもん」——伊右「なんだ」——岩「くるしい」——伊右「がんばれ」(ー)とさっぱりわけのわからないドタバタのあと、伊右衛門は刀を抜いてへたりこみ、着物の前をはだけ禪丸出して驚愕の表情。そこでお岩は「あの女、なに」(ー)——伊右「梅のことを聞くな」。お岩は「こんなに抜けて」と掌の髪を見る。その後、蛾か何かが中でバタバタと動いている行燈の方により鏡の前で髪を漉く。背景では伊右衛門と宅悦の呻き声が聞こえる。お岩は立ち上がり「わたしの顔がない」。宅悦はその顔を見て悲鳴をあげ、逃げ去ろうとするが伊右衛門にどつかれ、仕方なくお岩に抱きつき、なるべく顔を見ないようにする。同じ部

屋の中でその二人を腰が抜けたように伊右衛門が見ている。お岩が懐剣を出し宅悦を拒むと宅悦は逃げ出す。伊右衛門と二人になるとお岩は「あの薬は？」——伊右「婿に行かねえと仕官はできねえんだ。どこの城でもいいんだ」——岩「あの薬が？」——伊右「傘張ったり、風作ったりするのは侍じゃねえんだ。目えかつぼじってへママ、かつぼじるのは「耳」だろう、まっすく進まなきや（というから「目えかつぼじって」でなく「目を開けて」の意味だとわかる）。でも、てめえは敵だ。かたき討ちなんかじゃねえ。今はてめえが敵だ」とビビりながらという演出なのだろうが、ショーケン・伊右衛門、ここではきわめて滑舌悪く、劇場で一度だけ見た人のいったい何人が聞き取れただろうという調子で言う。と、お岩は「いつ？ いつわたしがあなたの敵になるような悪いことしました」。さすがは夫婦ということか、リスニングは完璧、すべて聞き取れたようで、なおかついつのまにか顔の痛みもすっかり消えたかのように理路整然と返す。伊右「なに」——お岩「あなたに敵だなんて呼ばれて、あんたなんか、見栄っ張りで、嘘つきで。なにが風ですか？ あの風なに？ あんた、まだこどもですか？ こども！ こども！ いらな——い！」(二)と伊右衛門を怒鳴りつけて立ち上がり胸をかきむしるようにして、「わたしの顔がない」。それから体が痛むのか、それとも錯乱状態なのか「誰これ」と自身の体を叩く。「だれ」と叫んで畳に倒れると、そこにあつたらしい懐剣に腹を刺し絶命(三)。すると、一間の中に火の玉があがる。伊右衛門は立ち上がる。床下から小平が出てくる。伊右衛門が「貴様、おれの留守に岩を手籠にして殺したな」と斬り付け、「ちがう」と抗つて倒れる小平に「ウソつけ」と言つて止めを刺す(四)。そして伊右衛門が表へ出ると、家の前には伊右衛門の仲間たち、野次馬の人だかりとなっている。刀を持って出てきた伊右衛門を見て怖がり、池に嵌る者もいる。伊右衛門「やった」と刀を地面に突き立てる。皆は恐れ戦いている。それに対し「あいつら二人、戸板の裏と表に貼り付けてどこかの川に流せ」と命じ、「おれのいない間に不義をはたらいた。そうするのがきまりだ」(五)。さらに「いっぱい飲んで景気つける。酒買ってこい」と懐から財布を出す。その金を拾う者も逃げる者もいる。伊右衛門は衣服を脱いで、井戸の水を頭からかぶる。※

意味不明な部分が多すぎるので、傍線強調と番号を付した。順に見ていきたい。まず(一)。お岩はなぜ選りに選

ってこの場で聞くのだろうか？ もっと前にするのが当然で、前にせねばならない質問。セリフが場所と時宜を得ていないのだ。この映画の脚本・演出の特徴は、観客が役者のセリフをその場で同時に理解できないところにある。苦悶の最中によろやっとお岩がすべてを一時に悟ったということにしたいのだろうか？ 不明。

次に(二)は文脈から見て伊右衛門への罵言だろうが、「いらぬ！」とはどういうことだろう。恨みの一念がこの世に残るからこそ怪談となるわけだが、「いらぬ」と執着を捨ててくれるなら伊右衛門にとっては、それこそ怪物の幸いでは？ あるいは、「いらぬ」とはお岩は自分の赤ん坊をいらぬという含みか？

(三)腹を刺してすぐに絶命できるのか(原作では柱に刺さった刀が喉首に刺さる)というリアリズムの問いは措くとしても、お岩の最期の言葉がこれではまるで女優のナルシズムではないか？ さらに「髪漉き」という原作においてはすべてを知った上で復讐への決意を高めていく場面が省かれているので、やはりどうしても一念を持つて死んでいくのかどうかわからなくなる。

(四)原作で押入に隠されていた小平がすべてを聞き知っていたのに対し、ここでの床下の小平はなにも聞かないというのは不自然。この二人の「ちがう」——「ウソつけ」のやりとりは原作以上にありえない。

(五)いったい、なんの「きまり」ですか？ 以上、意味不明なところはまだまだあるのだが、このあたりにしておきたい。というのも、これらはいずれも絶命前のお岩が伊右衛門と直接対決するという場面を作ってしまったために出て来たものなのだ。一つの見せ場作りのため、ほかのさまざまな辻褄が合わなくなってしまうという好例かもしれない。ほかに、原作ではお岩を離縁する口実のために宅悦に不義密通をしかけさせるのだが、ここでの伊右衛門は同じ一間に三人が居合わせる場で宅悦に刀を突き付けて威す。これでは変質者ではないか！

場面変わって、「伊藤喜兵衛宅」。立派な表門の戸を伊右衛門が叩くと、戸が開き、奥に一家の者が婚禮のいでたちでずらりと並ぶ。「岩の通夜もかねて今夜が本当の婚禮だ」と伊右衛門。喜兵衛は「赤子の世話はわたしどもが」と、ここで赤ん坊は無事だったとわかる。皆は出かける。

その先は隣の「伊右衛門宅」と、これは原作と同じ。庭で喜兵衛が赤ん坊を抱いている。家の中では伊右衛門、

お梅の新枕。蚊帳の中、お梅の顔がお岩に変わる。その顔に気づいて伊右衛門は飛びのく。と、今度は蚊帳にお岩の姿が映る。お梅の方を見ると、「どうしたの」と変わらぬ顔でお梅が聞く。「いやなんでもない」と二人抱き合うと、そこに蛾が飛んでくる。伊右衛門が手で叩き落として、今一度お梅を抱き締めると、その顔がお岩に変わっている。接吻しようと顔を見てはじめて気付いて「ぎゃあ」と刀を取って蚊帳を飛び出す。お梅が「いえもん」と不審そうに見る。花嫁道具が入っているらしい行李にぶつかるとその蓋があいて、中からお岩があらわれる。お梅が「いえもん」と甘えるようにうしろから抱きつく、伊右衛門の眼にはお岩の顔が映り、「化けもん」と語呂を合わせてお梅を斬る。お梅の悲鳴が聞こえ「どうしましたか?」と入って来た喜兵衛。その顔もお岩に見える（小平ではなく!）。「岩、おまえ」と抱いている赤子もろとも斬り捨てる。その後、すぐに伊右衛門は我に返った様子で、うろたえたのちに、畳を叩き、かきむしって悔しがると、その前で行燈が不自然に倒れ、すぐに家じゅうに火が回る。青々と茂った緑の庭にも火柱が走り、庭伝いに隣家の伊藤家に延焼した模様。この「不自然さ」が怪奇ということなのか? その後、火の激しさの割には不自然に小さめの半鐘の音が響く。※

場面は変わって、「橋の上」で娘がひとり凧をあげるが、旋回するばかりで宙へとあがらない。

場面戻って、「焼け跡」に伊右衛門が卒塔婆を立てている。自分の名前を書いたもの。卒塔婆をさらにいくつか持っている。先ほどの娘がたもとにいる橋の上を、すっかりしよぼくれた体で通り過ぎる。

伊右衛門は「三角屋敷」を訪ねる。軒には風鈴。直助は留守でお袖が一人。お袖「姉さん、元氣かしら」——伊右「ああ、元氣だ」。ここでまたバツハのBGM。出された茶を飲んだ伊右衛門は「もし、かたき討ちをしてしまったら、どうする?」。その言葉や顔つきに常ならぬものを感じたお袖は、直助には言わないから教えて欲しい、与茂七をあんな目に合わせたのは誰なんですかと詰め寄る。伊右衛門は逃げ去ろうとする。お袖が止めようとする、伊右衛門振り返って、今度はお袖に抱きつき「おれといっしょに逃げてくれ。おまえとだったらお岩も許してくれる。頼む」と最後は泣き声でむしやぶりつく。

場面変わって「隠亡堀」。直助は鰻取りの仕掛けを見ている。その背後になにも貼られていない戸板、と思うとそ

の場で反転して小平の死骸の面があらわれ、そして流れていく。直助は櫛を川から拾い上げ、からみついた髪の手を取る。背後を戸板が流れる。結局、最後まで直助は戸板に気がつかない。※

場面は変わり、一瞬「入浴するお袖」を映す。なにかが起こったような表情。

次に「三角屋敷」。盥で櫛を洗う直助。お袖がそれを手に取り、姉さんのものだという。これは原作通り。「そんなバカな。これは銭になるぜ」と、盥から真つ白い手が出て来て直助から櫛を奪い、直助がそれに気づいて「くし、くし」と慌てると、背を向けたまま直助に手を差し出すお袖に盥からの手が櫛を渡す。お袖が髪を漉いているあいだ、盥の手は直助の口をおさえている。これは原作からの改変。

場面は「どこかの街道」。卒塔婆を背負い旅姿のお弓と乳母が握り飯を食べている。そこに伊右衛門があらわれる。二人は刀を構える。伊右衛門は「ひとちげえだ」といったんは逃げようとするが、むこうは追い回すので、ついには二人を刺し殺し、その場を立ち去る。これは「隠亡堀」の改変。

さらに別の「街道」を待が数人通る。その中に与茂七の顔もある。

「三角屋敷」。直助は玄関先の側溝の水面に映る与茂七の顔を見る。おそろおそろ顔を上げるとそこに与茂七がいる。「ひー」と悲鳴をあげあとずさりする。「幽霊。お化け」と大騒ぎし、家の中へ駆け込み、戸を閉める。この部分の処理はおかしい。直助は自分が殺したのが与茂七でないことは知っているから、与茂七が生きていることも知っている。だから「幽霊、お化け」と怖がるのがおかしい。かりに、お袖をその場でだますための芝居というなら筋は通るかもしれないが、その程度の芝居のできない役者ではない（石橋蓮司）、ここでの直助のうろたえ方は本当にお化けを見たもののようにしか見えない。見えないのだが、その無理矢理の筋を通すように家に入ると、お袖に「落ち着け、お化けだぞ」と念を押す。外へ見に出たがるお袖を「ちがう、ちがう」と引き止めようとする。表へ出ると与茂七がいる。お袖は茫然と立ち尽くす。直助が「お化け、消えろ！」と与茂七を追い出そうとする。与茂七は「殺した仲間をおれに仕立て上げたな」と事情をすべてのみ込んでいる様子。二人が揉み合うなか、お袖は一人うずくまり、部屋へと戻る。直助が戻って抱きつく。その二人を与茂七が見てとると、突然とんでもないことを

言う。「いっしょに暮らそう。おまえを斬ってもあだ討ちにはならん。おれにはあだ討ちの方が大事だ」。不自然な三角関係として伊右衛門―お岩―お梅の組み合わせとこれを対にしたということか？　ともに目的のために手段を選ばない点で両者に共通性を持たせたいのだろうか？　だとしても、いかにも取つて付けたようなアイデアである。そこへ宅悦が突然やつて来る。薬包数袋を皆の前に出し、「これでお岩さんが」と呆けたように笑う。玄関には顔の崩れたお岩の幽霊が立つ。誰もその方を見ない。※

場面変わって「海岸」。伊右衛門が一人歩く。砂浜に穴が二つあり、水が貯まっている。それを飛び越えると（砂浜は一本道の道路ではないのだから、よけて通れば済むことだが）、その水の中からお岩があらわれ、伊右衛門の足にまとわりつく。逃れようとして上を見るとお岩が立っている。伊右衛門は水に嵌る。這い出ると、もう一つの穴から、左門、小平、お弓と伊藤家の乳母が出てくる。這い出てきた穴の方からはお梅と喜兵衛の幽霊が出て来る。みな一様に伊右衛門の方に手を出し、その穴の中へと引きずり込もうとしている。二つの穴のあいだの砂地で伊右衛門は引き裂かれるような形。これもオリジナル。伊右衛門の心象風景か。しかし、穴が二つあることの意味、それぞれのそれぞれの人物配置の意味も不明。また、お岩がそれを俯瞰しているのも意味不明。

一瞬、「橋の上」で凧をあげる少女がいる。

外では花火。「三角屋敷」でお袖が鏡をのぞいている。目には涙。与茂七の言った通り三人は一緒に住んでいる。与茂七「いつか岡場所に行ったとき触ってくれたのはおまえだった。暗くしていたし、黙っていた」と言う間、お袖がお岩の櫛で髪を梳いている。突然、笑い出して二人の方を振り返ると、右の頬がただれている。二人が驚くと「あたし、宅悦さんがこっそり隠してる（ママ、ついさっきみんなの前で広げて見せたのだが）のをもらって、姉さんが飲んでるのと同じ薬、飲みました」と懐から空の包みを出して投げ「ほら、こんなに！」。さらに、たまたま残っていたものを見つけ、その場で飲む。そのあと鏡台から懐剣を出し、与茂七に「すいません。いくらなんでも夫がいるのに、あたし、あの、伊右衛門にここで犯されました」。驚いてまず直助が立ち上がり「ウソだあ」。与茂七は「なにい」。袖「あたし、姉さんの後を追います」と懐剣をつかむところを直助が抱きつく、お袖は狂ったよう

に笑い出す。直助は叫び、「与茂七ー」と、お盆など周りにあるものを投げつけて「お前なんかノコノコ出てくるから、ろくなことならねえじゃねえか」——与茂七「うるさい、これはおれのウチだ」——直助「わしにはウチがない。いいだろ、それで。どこ行きやいいんだよ。あんたはいいよ、行くところがあるから、行くところがあるなら、いいじゃねえか。戻ってくるな。どこ行きやいいんだよ、わしは。言ってみろ、言えねえだろ。行くところなんかねえんだよ」と、さっぱりわけのわからない内容を、それも新劇の悪い見本のような滑舌の悪さ、聴き取りにくさで言ってお袖の懐剣を取り上げて暴れはじめる。与茂七は身をかわしそれをはらって、振り向きざまに刀で斬りつける。と、斬ったのは直助ではなく、お袖。直助「ひとごろしー」と叫ぶ。今度はその直助を斬り捨てる。直助はお袖の亡骸に近づいていって絶命。※

二人の死骸がそのままに横たわる「三角屋敷」の行燈が消える。BGMが流れる。そこに伊右衛門が入ってくる。疲れ果てた様子で二人が死んでいるのにも気づかず、すぐ軒をかいて寝入る。朝の光がさすと、「伊右衛門」と与茂七が起こし「勝負しろ」と刀を与える。伊右衛門は目を覚まし二人が死んでいることに気づき、「おまえー」と怒りの表情でにじり寄ると、与茂七は「全部おまえのせいだ。女房袖の父四谷左門のかたき、同じく袖の姉岩のかたき。伊右衛門、勝負しろ」——伊右「ごちゃごちゃ言うな」——与茂「おれのうちをこれ以上血で汚すな。貴様の血で汚されたくはない」

場面変わって、二人は「坂道」を下りていく。かなりの急坂のようで足下も危うく二人は転げ落ちていく。と、出たのは「海岸」。二人とも転倒したまま立ち上がれない。風の音が強い。伊右衛門「てめえは昔から気に食わねえ。邪魔するな。おれの邪魔をするな。勝手にやってる、あだ討ちは。おまえら、みんな死ぬー」と立ち上がらないままの姿勢で刀を抜く。与茂七も同じく立ち上がらずに刀を抜き、そこから殺し合いがはじまる。が、侍同士の果たし合いというより、ガキのケンカのように一方が刀を振り回し一方が逃げるの繰り返し。それも演出の意図なのだろう。ともに息の上だった二人は最後に波打ち際で互いに向き合い、気合いを入れ、ついには刺し違える。与茂七が先に絶命したように仰向けに倒れ、伊右衛門は腰が抜けたように座る。そこでまたバツハのメインテーマ。伊右

衛門は刀を落とし、うしろにゆっくりと手を伸ばして倒れる。それから横向きになり自分の身を抱きかかえるように体を縮め、最後には胎児のような姿勢。顔のアップになりBGMの音量が上がる。カメラは、こどもをあやすようにもちやをアップでとらえ、ついで赤子、そしてそれを抱くお岩の横顔を左側から映す。浪宅の焼け跡。お岩の膝には青い炎が立ち、赤子の着物にも火が点いている。カメラが引くと、顔の崩れたお岩が赤子を抱えている。BGMの音量がさらに上がり、雨が降ってくる。が、屋敷の炎は消えない。日が照ってきたのかその場は明るくなり、最後は画面全体が真っ白になる。と、夕陽が空に浮かんで、「終」。

「見たまま」は以上。さまざまな変更やオリジナル・シーンがあった。首尾一貫しない部分が多々目につき、まったく意味不明の場面も多く、けっきょく筆者には皆目、面白さがわからない映画であった。

以下、「見たまま」から少し離れて筆者の見方を書きたい。まずタイトルにある「魔性の夏」の「魔性」とはいつたい何を指すのか、最後までわからない。それゆえ、「看板に偽りあり」である。副題の「四谷怪談・より」の「・」の使い方も日本語として良くわからない。が、「より」が、南北の『東海道四谷怪談』から「現代にも通じるテーマ」を読み解き、そこに焦点をあて新しいものを打ち出そうと企図したのだろうくらいの想像はつく。それが今見ると、つまらない。逆にいかにも古くさい。公開当時「新しさ」を目指したものが、三〇余年の歳月を経ると、かくも救いがたく古くさくつまらなくなる。時代に洗われてしまったということか。それもあろう。「新しさ」を追求する者が、そのじつ時代に乗せられ流行に媚びている単なるださいヤツってことはたしかによくわかる。しかし、この映画のつまらなさほそれだけが原因でもない気がする。それでDVD付録の「演出の言葉」を読んでみた。「見たまま」という本稿の目的から逸脱するのは重々承知だが、この映画のつまらなさを理由を少しでも理解するためである。以下は、上演時のプログラムに載った文章だと思われる。監督曰く「四谷怪談を、生きる目的をみつけることができず、世界とつながる方法をついに発見することのできなかつた若者たちが陥ち（ママ）つづけてゆく物語」として描きたいと思います。私たちの四谷怪談では、もはや壮大な悪も強烈な怨念もなく、主人公たちは全て、相



対化され歪小化（ママ）されています」<sup>(2)</sup>。はて、「壮大な悪」が描かれた四谷怪談とはどのようなものだろうか？伊右衛門が大悪人などでなく、周囲に押し流され受動的に悪事に手を染めていくというのはこれまで他の映画でも確認した通りである。また「強烈な怨念」というのも、お岩の霊に見るべきはむしろ哀れさであり（舞台でも映画でも）、たとえば崇徳上皇や将門の怨霊に比べればその規模も小さいものなのだから、的確さを欠く表現である。

「壮大でも悲愴でもなく、よぎないかろやかさにさらされていることが、私たちにとつて大事なのです。それを透明な抒情をもって描くのです。文化・文政期のこの傑作は、映画も舞台も常に中年の男と女の物語として描いてきました。この物語は本来、伊右衛門、直助、与茂七という三人の主人公にしても、みな若者なのです」（引用は同前）。では、これまで見た映画の伊右衛門役の年齢を確認してみよう（なお、これは公開年の役者の年齢）。上原謙（40）、若山富三郎（27、32）、長谷川一夫（51）、天知茂（28）、仲代達也（33）、佐藤慶（41）。平均年齢が36才。最年長の長谷川一夫を除けば、<sup>33.5</sup>才。それに対し萩原健一（31）で、<sup>2.5</sup>才から<sup>5</sup>才程度しか年齢の違いはない。かつまた萩原健一は最年少ですらない。一方、舞台の方を見ると、一九七三年、一九七九年と、この映画の前には東京の本興行で伊右衛門を勤めているのは海老蔵時代の当代市川團十郎で、それぞれ27才、33才。歌舞伎の主役としては若い方と言わねばならないが、それは原作の主人公が若者だからなのだ。伊右衛門にしろ直助にしろ、その行動は若者の所業にちがいない。「中年の物語」に見えるのはせいぜい三隅研次監督作（長谷川一夫主演）くらいで、「本来」もなにも、中年の物語などではありえない。そもそも「中年の物語」というジャンルがあるのかどうか知らないが、四谷怪談をそう読み、そう見る者がどれだけいるだろう？ 少数派、しかも一握りであろう。繰り返すが、31才のショーケン是最年少ですらない。この点を見ても、蛭川は先行作をきちんと下調べせず、イメージでしか捉えていない。そしてそのイメージは四谷怪談というテクストの現実、あるいは先行作の現実と乖離している。

② 蛭川幸雄「演出の言葉」…蛭川幸雄監督『魔性の夏―四谷怪談・より』（DVD二〇〇五年、松竹）キャスト／スタッフ紹介より

批判すべき対象の実像が捉えられていない。つまり、蛭川はテキストのみならず、コンテキストも読めていない。「美しい様式美と、これらを若い俳優たちによって描けば、今までの四谷怪談とまったく違った新鮮で現代的な時代劇ができるはずです。／音楽も、バツハの『主よ人の望みの喜びよ』を使おうと思っています。／今までの四谷怪談のイメージをぬぐいさる新鮮な印象さえ最初に与えることができたなら、この映画は80%成功を手にしたといえると思っています」（同前）。

バツハのBGMに「新鮮な印象」を覚え、むしろ新奇さを狙った監督の自意識とあざとさしか感じられない筆者は、おそらく監督の求める観客ではない。それは差し引くとしても、「新鮮な印象さえ最初に与えることができたから、この映画は80%成功」とは、映画というものをわかっていないばかりか、映画を、映画の観客を、四谷怪談をバカにしすぎではないか？　せめては舞台と映画がまったく別物であることぐらい、事前に勉強せねばならないだろう。文中に何箇所か付した※部分は、もしかしたら舞台でならば理解されるかもしれない場面ばかりなのだ。そして、それはまた映画としては理解不能な場面だった。下調べをまともにしないから、先行作品に対する批判を提示できず、批判の視点がなからパロディも成立しない、作家のイメージが現実と乖離しているから、現実との葛藤が生まれない。現実との葛藤がないからドラマが生まれない。かように各部が脱臼している思考回路の上で、きあがる思想など、思想とは呼べまい。ドラマトゥルク不在のテキスト放棄で「現代性」だけ求めたらば、「四谷怪談」もここまで意味不明になるという好例とすべきか。蛭川は自身の文をこう締め括る。「この物語の中の青年たちは、大半が死んでしまいますが、怨念や陰惨さを強調しすぎず、死んだ彼らの顔がはじめて安らぎを得て、美しさとあどけなさに輝くよう描くつもりです」（同前）。その結果、この映画に残るのは犯罪的事件だけで、ここに生きる人間はいなくなってしまうた。あるいは、「魚の鱗が嫌い」、「凧あげが下手」と自ら妻に語って聞かせる犯罪者のモデルがこの時代にはいたのだろうか？　かりにそうだとしてもこの伊右衛門の形姿に何を見よというのか。ただ、そういうガキを「現代的」と感じた監督がいたということだけがたしかである。そして、そのガキたちに対しこの監督がじつに無責任な大人であることも確認できた。こうした映画を面白がって楽しめるのは、おそらく蛭

川演劇の観客だけだろう。ショーケン・伊右衛門と石橋蓮司・直助の、それぞれお岩と与茂七を前にしての、あの滑舌の悪さこのうえない意味不明のセリフを、興奮して何を言っているのか聞き取れないのを「熱演」と取り違えて見逃す、どころか喝采を送って甘やかす、そういう観客、つまり蜷川の芝居を見る時間的・経済的・精神的余裕を持っている観客限定対象の映画。ここには歌舞伎版上演へのヒントもなければ、知的刺激もない。

二、「貧しさに負けた」…木下恵介監督・久坂栄二郎脚本『新釈四谷怪談前篇・後篇』（一九四九、松竹）

伊右衛門	お岩	直助	小平	与茂七	お袖	お梅	宅悦
上原謙	田中絹代	瀧澤修	佐田啓一	宇野重吉	田中絹代	山根寿子	玉島愛造

冒頭、激しい暴風雨の夜、塀を乗り越えてきた男が牢獄の錠を開ける。場所は「牢屋」の表口。「牢破りだ」の叫び声が響き、一気に駆け出す脱走囚。すでに知っていたかのように、牢番が大挙してあらわれ、囚人たちを押しとどめる。戸を開けた者はふたたび塀に登り逃げ去ろうとするが、下から斬りつけられ絶命。大勢はすぐに決し、斬られた囚人の一人が「誰だ、裏切りやがったのは」と叫んで倒れる。その後も囚人たちは次々に斬り捨てられる。戸を開けられた「牢の中」に一人入ってくる囚人がいる。奥には後ろ手に縛られ折檻された傷跡の残る男が仰向けに倒れている。その男に向かい、男は「小平、てめえはなかなか利口者だぜ。やつらみんな捕まりやがったよ（…）おれとおまえはどうやら早めに娑婆の風に当たれそうだ」と話しかけ縄を解きながら、「ツラに似合わずなかなか強情な野郎だな。こんな目にあいながらも仲間に加わらなかつたのは、てえした度胸だ」。そこにもう一人の囚人があらわれる。手負いの様子で、「直助、てめえ、おれたちを裏切りやがったなあ」と掴みかかるが、あえなく倒れる。それで牢破りを密告したのが直助、加担せずに囚人たちから縛られていたのが小平であることがわかる。以上、

すべてこの映画のオリジナル。以下もほとんどすべてオリジナル・シーンなので、この映画についてはとくに太字強調は用いないことにする。

場面変わって「茶屋」の前。「お忘れ物」と小平を茶屋の女が呼び止め、「あの子は茶屋女にはめずらしく、氣立てのいい真面目な子だったから、わたしも目にかけてやったんだがね」。小平「おばさん、ほんとに居所を知らないんだね」——茶屋女「ええ、わたしはさつぱり。氣を落とさずに探してごらんよ」。悄然としてそこを立ち去ると、町角で「小平さんじゃないか」と葛籠を背負った男が呼び止める。それが与茂七。「あつ」と慌てて逃げ去ろうとする小平を追いかけ、「逃げることはないじゃないか。おつかさん心配してたぜ。でもまあ、無事でなによりだった。おつかさん喜んでたる」。それから二人歩き始めるが、小平はうなだれて黙ったまま。「小平さん、まさか国許に帰らないんじゃないだろうね。おつかさん首を長くして待ってるんだぜ。それでこれからどうしようっていうんだ」。与茂七は小平を家まで連れて帰る。与茂七の長屋で「水臭いぜ。こどもの時分から隣同士で仲良くしてきたんじゃないか。江戸へ奉公に出るときだって、一緒に草鞋をはいてよ」。さらに商用で「行田」にいったとき小平の母親を見舞つたと言うから、二人は武蔵国行田の出ということらしい。これも原作にないオリジナル。相変わらず一言もしゃべらない小平に「遠慮せずに打ち明けておくれ、何か考えていることがあるんだろ」。小平はようやく顔をあげ意を決して、「おれはただ一目でいいから会いたい女がいるんだ」——「おんな？」与茂七が驚く。小平には惚れた女があり、その女のために奉公先の店の金を使い込んで、牢に入ることになった。が、今でも女のことを恨んでおらず、一目あつて女の本心が聞きたいという。と、そこに奥の間から声がかかり、小平がいなかった間にもらつたという与茂七の女房のお袖(田中絹代の二役)があらわれる。小平はお袖を一目見るなり、「あ、お岩さん。おれだよ、小平だよ」。おどろいてキョトンとするお袖が「お岩はわたしの姉ですの。わたしたち似てるんです。よく間違えられるんです」。それで、与茂七が「まさか、おまえのたずねている女のやつていうのが」——小平「お岩さんだ」。さらにお袖に向き直って「今、どこにいますか?」——お袖「四谷の左門町におります」——小平「四谷の?」——与茂七「今じゃ、お侍のお内儀だよ」——小平「もしかしたら、民谷伊右衛門といいやしないか?」——与茂七「そ

うだよ」——小平「やつぱり」とそれから横顔のアップになりひとりごとのように「そうか、そうだったか」と口ごもると、場面が変わる。すべてオリジナル・シーン。与茂七は塩治の家臣でなく、行田から江戸に出てきて現在はどこかの商家の番頭で、小平とは幼なじみ。原作では許婚の仲のお袖とはすでに所帯を持っている。お袖とお岩が姉妹というのは原作通りだが、原作では血のつながりが無いのに対し、ここでは顔がそっくりの実の姉妹であるとしている。田中絹代の二役というのも、それを強調する意図だろう。ずいぶんと変更が激しいが、なかでも、小平がお岩に惚れているという点が、この映画の主筋になってくる。

場面が変わる。神輿が練り回り、まちは「祭」で賑わう。喧嘩が持ち上がる。ヤクザものらしく刺青をした男たちが着流し姿の侍を取り巻く。この侍めっぽう腕が立つ。ヤクザものたちを蹴散らして、茶屋においてあつた深編笠を取り、感謝する女の二人連れをその場に残し立ち去る。それを雑踏のなかから見ていた直助が「民谷さん」と呼びかける。喧嘩が強い伊右衛門というのは、よくあるパターン。再三御札の頭を下げる女中お禎と、うつとりと後姿を見送る若い娘お梅。これもよくあるパターン。以上、公開当時からこうしたシーンはお約束なのか、セリフはいっさいなし。原作の浅草「額堂」の改変シーン。

場面変わって「居酒屋」。直助が伊右衛門に酒をつぎ、「てえしたお手柄だ」、伊右衛門が助けたのが「江戸きつての廻米問屋、一文字屋のお梅という一人娘」であるという。「なんとか小町といわれるほどの器量よし」のお梅が「さつきはあんたの男前にうつとり見とれてましたぜ」——伊右衛門「馬鹿を申せ（……）なにを下らぬことを」——直「これはいっぱい飲めますぜ」と腹に一物の様子。原作の伊藤喜兵衛の孫娘のお梅がここでは一文字屋の一人娘と変えられ、武家の伊藤家は「一文字屋」という廻米問屋となっている。その居酒屋へ坊主頭の按摩宅悦が駆け込んできて「旦那、たいへんだ、ご新造さんが」——伊右「岩がどうかしたのか」——宅悦「流産なんで」。

外へ出ると、宅悦が「踏み段から落ちまして」——伊右「なんだってそんなバカなことを」とさらに家へと向かう途上、伊右衛門の横顔がアップになり、回想シーンがつながる。雪の降る坂道を、傘をさす伊右衛門と芸者姿のお岩が登って来る。寄り添う二人の睦まじさがわかる。続いて季節が変わって釣り糸を垂れる伊右衛門の横に

お岩が座り、瓢箪から酒をつぐ。笑顔で受ける伊右衛門がまず飲み、お岩につぐ。お岩の簪の多さから見ても、芸者風。さらに季節と場所は移って茶屋の一室。浴衣姿の二人が団扇を持つ。窓辺に立つお岩の足を、座ったまま伊右衛門が抱き寄せる。と、お岩は腰を下ろし二人は口づけする。それをカメラは蚊帳ごしに捉える。

そこから場面が変わり、横になったお岩の顔のアップ。場所は「伊右衛門宅」。このカメラの移行により先の回想シーンが伊右衛門のものかお岩のものか曖昧になる。床に伏せるお岩が横を向くと庭先では伊右衛門が内職で作ったおぼしき傘を束ねている。起き上がって、「届けてくださるの？」と聞くと、伊右「少し前借りをしてくる。医者の払いもあるからな」——岩「元々はわたしの粗相から、赤ちやんを」——伊右「やめろ、かえらぬ愚痴だ」。傘をまとめるとお岩が脇差を差し出す。とそこまでは、病後の妻を気遣う夫と、それを申し訳なく思う妻、回想シーンに比べてずいぶん貧しくはなったものの、互いに支え合う夫婦に見える。が、出かけるときに「お早いお帰りを」とお岩が声をかけると、伊右衛門「その『お早い』が気に入らぬのじゃ。なぜ酒を飲むな、とはつきり言わぬのだ」と声を荒げる。やはり、貧しさに堪えかねているということか、束ねた傘と脇差の取り合わせも今の伊右衛門の境遇を伝える。家に残るお岩はなんともやりきれないといった表情。まだ体調もすぐれないようで、ただただ憔悴している。と、そこへお袖がたずねてくる。お袖「せっかくの赤ちやん、惜しかったわね。でも姉さんに別条がなくてよかつたわ」。そして持って持ってきた風呂敷包みをひろげ、着物を取り出して「誂えただけど、わたしには似合わないものだから、姉さんにどうかと思つて」——岩「いつもすまないねえ」。明るい妹のお袖に地味な姉のお岩。お袖「お兄さんは傘をかかえていらしたけれど自分で届けるの（……）どうせ傘の御代なんか持つて帰らないんじやない。のんだくれて姉さんを困らせてばかりいる」——岩「さびしいのよ、あの人も。浪人暮らしももう長いんだし。それにせっかく楽しみにしていた赤ん坊があんなことになつて」。これで、三人の関係がだいぶわかつてくる。そこにお袖が「このあいだね、姉さんを探していた人があつたわよ」と小平のことを話し、かさねて「いつたい、どういふ関係なの、あの人は？」——岩「何でもないので。ただね。私が店へ出ていた時分にせっせと通つてきたお客さんだけ」——袖「向こうじゃたいしたのぼせ方よ。使い込みをして牢に入つたのは、姉さんのためとか……

「……」岩「だって、私のせいじゃない」——袖「そうよ、そんなのにいちいち関わりあつてたんじゃ駄目よ、……いづれ会いにやってくるだろうけど、姉さんはすっかりしなきゃ」——岩「言われるまでもないわよ。貧乏こそしていても、わたしはれっきとした武士の妻ですよ」——袖「その武士がねえ。姉さんはあんまりおとなしくびくびくばかりしているから、旦那様がつけあがるんだわ。お侍だろうとなんだらうと夫婦じゃないの、好きでいっしょになつたんじゃやない。もつとずけずけ言えばいいんだわ」。お袖のセリフを見ると、二人は武家の出ではないらしい。そこが四谷左門の娘という原作から変えたところ。またこの二人はずいぶんキャラクターが違うということもわかる。対照的な姉妹を田中絹代の二役にあてたのは、脚本が先か企画が先か、どちらかわからない。以上オ리지ナルだが、お岩が流産し、お袖がお岩に着物を持つてくるという点、さらに小平がお岩に懸想しているという点まで、先に見た三隅研次監督・長谷川一夫主演作と似ている。三隅がこの作品を型として踏襲したと思われる。

「城門の前」。傘の風呂敷包みを抱えて通りかかる伊右衛門のかたわらを、長槍を抱えた奴を従える袴姿の侍、さらに城門からは馬に乗って出てくる侍たちを通りかかる。うらぶれたわが身をかえりみ、さびしそうな表情。

「橋の上」。日傘を差すお楨に直助が声をかける。「あなた様は、一文字屋の」——お楨「はあ」——直「じつは人に頼まれてることがあるんですがね」——楨「わたくしに」——直「頼んだお人というのは、ほれ、せんだつての祭のおりに、お宅さんのお嬢さんをお助け申したお侍さんなんだが」。と、お楨は笑顔で「まあ、あのお侍さんをあなたはご存知で」——直「へえ。あつしやあ直助という植木職で。お住まいがご近所なもので、あの方とはいつてごじつこんに願っております」——楨「まあ、それでございましたか。それはいいお方にお目にかかりました」——直助「と言いますと」——お楨「じつは、あのお武家さまのお名前もお所も、つい私の粗相から承りませず、お嬢様は是非もう一度お目にかかつてお礼を申し上げたいと申されました」——直助「へー、そうですかい」と万事のみこんでいるといったようなしたり顔。先の「居酒屋」での「いっぱい飲める」という企みにさつそく動き始めたところ。直助が「頼まれごとがある」と口にしたのに、お楨の方からお願するような応対で、まさに直助にとつては渡りに船といった感じだが、こうしたところもお約束といった脚本。しかし、直助のいう「頼まれ」た用

というのはいったい何だったのか、お楨がこの男のことを信用せずに、すべて説明させたら、直助はどう応えたのか？ そうした疑問が出てもおかしくない気もするが、とにかくとんとんと事が運ぶ。これもすべてオリジナル。夜空に「花火」があがる。橋の上で見物する人混みのなかに直助と伊右衛門がいる。伊右「どこへ連れて行くんだ」——直「だんなに死ぬほど恋焦がれているお嬢様がいる。(……) 論より証拠。そこに一文字屋の寮がある」と案内する。花火があがる。

場面が変わって「一文字屋の別宅」。縁側に伊右衛門とお梅が並んで花火を見あげている。お梅が一言「きれい」。と伊右衛門「花火もきれいだが、そなたはもつときれいだ」。お梅は恥ずかしがる。「別の部屋」で直助がお楨と酒を飲んでいる。直助「いけるロジやないか、おまえさん」——お楨「おほほほ」。直助「お嬢さんたちはむこうで仲良くやっている。(……) こつちはこつちで」と障子を閉める。

場面戻って伊右衛門とお梅。なにを思ったかお梅は庭に出る。伊右衛門もあとを追う。泣き出しそうな顔のお梅は「民谷さま、わたくし、夫を迎えねばなりません」——伊右「それはおめでたい。婿殿をむかえられるのだな」——梅「いやです」——伊右「でも、ご当家の婿となればさだめしご立派な方であろう」——梅「民谷さま」と思いつめた表情で言うと、間に花火。お梅は「民谷さま」と泣き出し顔を伏せて伊右衛門の手を取り、「あの時からあなた様のことが忘れられず」と言って駆け出す。伊右衛門はほほえむ。まんざらでもないといった様子。が、その表情がすこし引き締まったものになる。

と、そこで場面は変わり「伊右衛門宅」でお岩が傘張りをしていると、庭先に小平があらわれる。「会いたかった」——お岩「なんの御用ですか？」——小平「そりや、あんまりだ。そんな、冷たい。おれはただ、おまえさんに会いたいばかり」——お岩「会ってどうなさろうとするんです」。小平は思わず座敷に上がって泣き出して語る。ほかに男がいることを承知で惚れて、牢へ入るまでになったが、お岩を恨んでいない。ただ一目会って優しい言葉をかけてほしいという。お岩は「よしてください。わたしは主人のある身です。かりにも人妻をつかまえて。帰ってください」。小平はさらに泣きつくが、お岩もほんとうに困った様子で「帰ってください」。小平はうつむいたまま、



しょんぼりと立ち去りぎわに振り返り「おれは死んでもおまえさんを忘れはしない」。お岩は困惑顔のまま見送って雨戸を閉める。

「夜の道」、直助と伊右衛門が並んで歩く。直「今夜はだいぶお楽しみでしたね（……）これでおまえさまも出世の道が開けますぜ（……）あとは一文字屋の親父にうまく取り入って」——伊右「どうしようと言うのだ」——直「あのお嬢さんと夫婦になるんでさ」——伊右「拙者にはお岩という……」——直「れっきとした奥様がおあんなさる。さよう。このあいだの流産で御成仏なされば、奥様もかえってお幸せでしたのに」——伊右「なに」——直「甲斐性なしのご亭主で、この先ご苦労せずに済んだ。そして、あなた様は、あのきれいなお嬢さんと一文字屋の身上を自由になさることが出来たんだ」——伊右「なにを、バカな」——直「まあ、貧乏暮らして一生を終えれば地獄へ行つたとき、閻魔さまの覚えがめでてえといえますからな。まあひとつ、胸に手をあててよくお考えなせえ」と言つて去る。これが直助の企みということらしい。一文字屋の一人娘の思い人たる伊右衛門を紹介し、さらに婿入りさせて自分もおこぼれに預かろうという算段。これは以前に見た直助像としてあるパターン。しかし、伊右衛門はすべてが凶星なのか、反論に勢いがない。

場面は再び「伊右衛門宅」。「早く良くなればいいですね」と宅悦が帰ると、お岩は薬を煎じる。そこへ表戸を叩き「岩、岩」と伊右衛門が帰ってくる。「心細かったもので」と、小平のためにした戸締りをお岩はごまかす。家に入ると伊右衛門は「なんだ閉め切つて暑いじゃないか」と怒る。そこから伊右衛門は不機嫌にあたりちらす。お岩「こんなに遅くまで、どちらへ」——伊右「遅く帰つたらどうだと言うのだ」——岩「いえ、別に」——伊右「つべこべ申すな」——岩「はい……あの、お食事はどうなさいます」——伊右「水をくれ」——岩「はあ」——伊右「水を持って来いというのだ」——岩「は、はい」。しかし、立ち上がると足もともおぼつかなく水をこぼしてしまふ。伊右衛門はとたんに怒り「何をするバカ」。お岩は泣き出す。「またメソメソと。おれはその泣き顔がきらいだ」。縁側に座り団扇で暑そうにあおぐと、お岩が水を持ってくる。伊右衛門は「どうだ、からだの具合は。少しはよいのか?」——岩「はい、おかげさまで」——伊右「うちにばかりいるからいかんだ。今度釣りにでも連れて行つ

てやる」。お岩は泣き出し、伊右衛門が「どうしたんだ」といぶかると、「うれしゅうございます」と泣き伏せる。伊右衛門はさすがにいじらしくなったのか、肩に手を掛けると、畳の上に煙草入れがあるのに気づく。伊右「あの煙草入れはなんだ」——岩「あれは、小平さんの」。誰だそれはと聞いて昔のなじみの客だと知ると、「それがこの座敷へ上がりこんで何をしてたのだ」と声を荒げる。お岩が驚くと、「そうか、二人きりで、閉め切って、そりゃ、お楽しみだったな」。お岩としてはもとより濡れ衣で、突拍子もない疑念が可笑しく思われたようで笑い出し「そのようなはしたない邪推など」——伊右「なにがおかしい」——岩「許してくださいませ。おかしいどころか、それほどまでにこのわたしを。うれしゅうございます」と伊右衛門に抱きつこうとする。伊右衛門はそれを振り払って立ち上がり、「貴様、武士の妻ともあるう者がはしたないぞ。茶屋女の根性がいつまで抜けない」。お岩は手をつけて「すみませんでした」。伊右衛門は憤怒のまなざしで見下ろす。こうした二人のやりとりもすべて原作にはないもの。お岩の言葉や態度がいちいち癪に障る。叱りつけると謝るから、いやでも自身の理不尽さが感じられ、お岩がいじらしくもなり、優しくしようともするがまたその態度が気に入らない。これは、しかし、夫婦の痴話喧嘩として、むしろありふれたものではないだろうか？ この場面、この映画の視線は伊右衛門側にある。お岩は終始受動的で、伊右衛門の感情に振り回され、ただそのあとを追うばかりである。

「一文字屋」で女の悲鳴。お榎が手に刺刀を持って「だんなさま」と叫んでいる。「お嬢様があの縁談はいやだよと言いまして。おかわいそうに」。事情を聞くとお梅は「お父様、お願い」と泣き崩れる。すべて事情を知っているお榎が主人に耳元で説明する。

一文字屋の「庭」で植木の手入れをしている直助とお榎が相談事。旦那がお梅と伊右衛門の件で直助を頼りにしているという。直助「お榎さん、あんたはいい人だ」と腰に手をまわす。お榎は「人に見られたらどうすんのさ」と言うがまんざらでもなさそうだ。それにしても杉村春子のお榎はじつにようすがいい。柳腰というのか小股の切れあがったいい女とはこういうのをいうのか、着物の着こなし身のこなし、すべてが艶っぽい。色っぽいお榎としては豊田四郎監督の淡路恵子と双璧。一文字屋主人が遠くから「まき」と呼ぶ。直助「おめえ、あの旦那と出来て

るんだな」——お楨「誰があんなおいぼれと」——直「どうだか」。これは本当にわかつたものではない。

「居酒屋」に直助が行くと、伊右衛門が飲んでいゝ。一文字屋がせひ会いたいと言っている、お梅との仲がうまくいけば、お岩さんのことは切つてしまつて、とまで言うと、奥の間でたたか酔つてゐる小平が「なんだ、お岩だ」とあらわれる。直助「小平じゃねえか」。伊右衛門も聞き覚えのある名前に「小平と申すのはそのほうか？」と一瞬色をなす。小平「だから、どうだつてんだよ」。直助が「民谷さん、およしなさい」となだめると、小平がその名前を聞いて、「民谷伊右衛門つてのはおまえさんかい」、さらに「おれはお岩さんに惚れてるんだ。一生棒に振つて、命がけで惚れてるんだ」。それを直助がなだめながら表へ出す。伊右衛門はその場で黙つてゐる。

「川辺」（木材があるから木場か）に直助と小平。直助は牢屋の頃からの知り合いだからお岩さんの件でも力になろうじゃないかと言う。小平が「そういえば直助さん。おまえさんは注意しなきゃいけない」。牢破りの件で直助を恨みに思つてゐる人間が探してゐるといふ。直助は「俺を売りはしないな」——小平「とんでもない」。すると直助は、明日の晩自分が伊右衛門を一晚中連れ回すから、その間に小平はお岩に会つて、手籠めにしてでも、思いを遂げたいといふ。

「一文字屋」の廊下でお楨と直助が立ち話。お楨「だいぶお話が弾んでゐるようだよ」。場面は「奥の間」に移る。伊右衛門が一文字屋主人と対座し、自身の境遇を語る。親とは死別し、浪人してから七年になる。浪人したのはお蔵破りの盗賊のため、蔵の鍵を管理してゐたので、その責を負つてこうなつたといふ。いっぽう、一文字屋は、母親がない一人娘が不憫で願ひはなんでも叶えてやりたい、それが伊右衛門にすっかり執心してゐる。「身の回りのお世話をするお女中衆がゐる」ことは承知してゐるが、もし娘を貰つてくれるならば、「そのお女中衆とははつきりご離別していただきたい」。ご仕官の儀もお世話したい。勘定奉行をはじめ付き合つてゐるお武家は少なくないといふ。伊右衛門は黙つて聞く。そこへお楨が膳を運んでくる。主人「まあ、おくつろぎになつて」。ここでのお梅は「孫」でなく「一人娘」。一文字屋は高師直の家臣の「武家」でなく「廻米問屋」ながらも、武家との付き合いがある。いろいろと改変があるが、娘が伊右衛門に恋慕してゐる点、家長がその思いを遂げさせてやりたい、そのためには伊

右衛門にお世話をするのはいとわかないという点は原作通り。

「夜の道」に伊右衛門と直助が並ぶ。直助『身のお世話をするお女中』とは、喜兵衛旦那も粋をきかせましたぜ。一文字屋主人の名は原作と同じで喜兵衛。伊右衛門は直助に、いつまでも浪人のままではいられないと言う。すると直助は、お岩さんは昨日の小平と乳繰りあっているかもしれない、小平が命をかけてもお岩さんをもにすると言つてたと言う。「とにかくお宅へ帰ってみましょう。もし本当だったら、それこそ勿怪の幸い。そんなお内儀は離別して追い出してしまやいいで。こつちの思う壺でさあね。これも改変である。オリジナル脚本のために原作の都合のいいところを借用したといった処理。

「伊右衛門宅」の玄関で小平とお岩が激しく言い争う。話を聞いてくれと頼む小平と、ひたすら帰つてくれと拒むお岩。通りかかった宅悦にお岩は「助けてください」。戸外で宅悦が小平を取り押さえているうちに、お岩は家に入り雨戸を閉め戸締りする。小平に対し宅悦は杖を持つて追い回し、ついには追い払う。が、それで安心したのか、足を捻つて転び、お岩に家に運び込まれる。そこに伊右衛門と直助が帰つてくる。直助はこの暑い晩に雨戸まで閉め切っているのは妙だろうと伊右衛門に言い、伊右衛門も玄関先に雪駄を見つけ不審がつて雨戸の穴から中を覗く。お岩が「お世辞にもそう言ってもらえると嬉しいわ」と言う声が聞こえる。伊右衛門はたまたま雨戸をはずし中に走りこむ。宅悦「はあ、びつくりした。なにがあつたんですか」。伊右衛門は思わず「宅悦、貴様か？ 岩と不義をしていたのか？」とわけのわからないことを言い、「なぜいま時分から戸を閉め切つておつたのだ」と、これでは直助に簡単に手玉に取られるのも無理はない。疑われたお岩は泣き出して「あんまりでございます」。宅悦も「奥方は不義どころか貞女の鑑」と留守中に起こったことを話して聞かせる。お岩は泣き続ける。伊右衛門が直助を見ると、決まり悪そうにその場を立ち去っていく。今回は直助の企みが失敗に終わるという一段。

場面変わつて「与茂七の長屋」を小平の母親が訪ねている。ちなみに母親おくら役は飯田蝶子で、毛利正樹監督作で伊右衛門の母親を演じ強烈な印象を与えた女優。小平を探し回っているがまだ見つからない。「草の根わけても探し出す」と言い去る。見送る与茂七「恋に狂つた男というのは困つたものだ」。お袖は「姉さんも可哀相ね。夫か

らは冷たくされる。好きでもない男からは付け回される」と言う。

場面は変わって、「川か池のほとり」に伊右衛門とお岩が連れ添って釣りに来ている。お岩はお袖にもらった着物を着ている。伊右衛門の口元にはうつすらと無精髭が見える。さらにやつれた様子。伊右衛門が誘ったらしい。お岩は上機嫌で「わたし、子供が欲しゅうございます。流産のあとに妊娠しやすいと申します。今度こそよく気をつけて……」。と、そこに魚がかかる。それを取って魚籠に入れようと水辺に向かうお岩を、伊右衛門は突き落とそうとするかの形相で近づくと、転びそうになったお岩を逆に助け起こす。そしてついに意を決したように「わしのような甲斐性なしといっしょでは、そのほうは一生の不幸せであろう。別れようではないか」。さらに、「おまえの体の治るのを待っていたのだ。わしも浪人生活がつくづくいやになった。おまえもまた一人身になれば、きつとまた元のお岩になれる」。お岩は驚き「小平さんのこと、まだ疑いが晴れないのでしょうか？」——伊右「そんなことではない。おまえの幸せを思えばこそだ」——岩「元のお岩になど返りたくございません。身にしみついたあの暗いかげをほらおうと、わたしは、この三年のあいだ、どんなに一所懸命でございましたよ」——伊右「いや、なにも、茶屋奉公をまたしろというのではない。そこからはお岩の長いセリフ。自分が茶屋奉公したのは妹と病気の父を抱えていたからで、父に死なれてどうしようと思っていたところを伊右衛門に救われ、生きる道を見出した。それがいま見放されたら生きていけない、おおよそそういうことを言って泣き崩れる。伊右衛門は「もういい、わかったもう泣くな」となだめ、二人で帰宅する。その場は終わり。これで、お岩の素性もよくわかる。原作の辻立ちの件をずいぶん長く引き伸ばしているようである。原作ではお袖の茶屋奉公の方は一場となるほどの重みを持つが、ここではお岩がお袖と父親を養うためという設定。

場面変わって「博打をしている家の中」で、直助が金を貸してくれないかと刺青のヤクザものに相談して断られている。外にいる見張りの男に伊右衛門が直助はいるかと聞く。呼ばれた直助は勇んで出てくる。伊右衛門「話があるんだ」——直助「じつはあつしもお話があるんで」。

二人並んで歩き出す。直助が「一文字屋の方はしびれを切らしてやすぜ」となかなか話を切り出さない伊右衛門

に尋ねると、伊右「先方にはお断りしてくれ。わしにはだめだ。岩が不憫で」——直助「なんだ、だらしねえ（…）」大方そんなことだと思つていた。（…）今日はおまえさんに上げようと思つて持つてきてるものがあるんで」と袱紗に包んだ薬包を見せる。「産後の妙薬でさあ。これを一服盛りやあ」——伊右「えつ」と驚きあかずさりする。直助「男は度胸が肝心ですぜ。出世のためなら、女の一人や二人」。拒む伊右衛門に続けて「なんだい、メソメソして、おまえさんだつて、貧乏には嫌気がさしているんでしよう。（…）贅沢ができるんですぜ。お梅さんが…」、さらに拒み続ける伊右衛門の手に薬包を握らせる。このあたり伊右衛門はつねに受動的である。直助が悪人であるに引きずられるというのはほかの映画でもよくあるパターンではある。にしても、ここでの上原伊右衛門はとにかく迷い、はつきりせず、自分で事を決められず、逡巡する。そしてこの映画はそこを長々と映す。その長さにいささか辟易するが、伊右衛門が悪でないという「新釈」のためにはこの長さが必要ということか？

次の場面は夜の「伊右衛門宅」。お岩の前でも伊右衛門は元氣のない表情で、「お食事にいたしますか」と問われども茫然自失の様子。お岩のほう心配して「今日は取り乱しまして、（…）お許しください」と釣りの時のことを謝る。伊右「いや、もういいんだ」——お岩「お願いですから、もうあんな話はなさらないで」。そこでお岩はいつまでも病人じみているのもよくないから、薬を飲むのをやめようと思うと言うと、伊右衛門は「本復までは飲まなければ」。このあたりの伊右衛門の真意もわかりにくい。お岩は「あなたがそうおっしゃるなら」。伊右衛門はお岩を見て「長いあいだの貧乏暮らしで苦労したな」と妙にしんみりとした調子でいたわるように言う。お岩は「何をおっしゃるんです。お床をのべましようか」。

別の日の昼間の「伊右衛門宅」。傘を張る伊右衛門と庭先で出来上がった傘を並べるお岩。縁側には薬が入っていると思しき土鍋が火にかけられている。伊右衛門はお岩がその場を離れた隙をみて薬包を取り出し鍋に入れる。お岩が戻つて来て湯呑に汲み飲もうとする。が、熱いらしくふーふーと冷ましてその場に置く。伊右衛門は飲む場を正視することもできないようで、背を向ける。お岩は近くにある傘に気づいてそれをまともめ片付ける。戻つてきてまた湯を飲もうとすると「あつ」と言つて庭に捨てて。驚いて伊右衛門が振り返るとお岩は「蠅が入つておりまし

た」。伊右衛門は傘張りの作業に戻り、ひとり物思いに沈んだあと、「お岩、飯にしてくれ」。お岩は盥にお湯を入れている。「今お水を入れますから入ってください」。行水用らしい。と、伊右衛門は突然「わしと別れてくれ」と言い出す。お岩「また、そのようなことを」——伊右「上方へ行つて仕官の口を探そうと思うのだ」——岩「わたしも連れて行つてください」——伊右「足ままといになるだけだ」——岩「うそ。あなたはわたしと離れたらばっかり」——伊右「浪人暮らしに飽き飽きしていることはよく知っているではないか」——岩「それならなぜわたしを連れて行つてくれませんか」——伊右「おまえといっしょではわしが困るのだ」——岩「なぜでございます。わたしは卑しい女だからですか？ わたしを殺して行つてください。どうぞわたしを連れて行つてください」と頭を下げると、逆に伊右衛門の方が「頼む、頼む」と畳に手を付いて頭を下げる。お岩は「いやでございます」と立ち上がると、伊右衛門も立ち上がり「どうしてわかってくれないんだ」と今度は怒りだす。「どうしてわしの苦しい気持ちかわからないんだ」と問い詰め、「わしを助けるつもりで別れてくれ、でないとわしはもう恐ろしい」——岩「何が恐ろしいのでございますか？」。伊右衛門はお岩の手を取り「頼む」——岩「いやでございます。あなた」と抱きつくと、伊右衛門それを振り放す。と、そのはずみで倒れたお岩は縁側から転げ、庭に置いてあつた盥のお湯の中に顔から落ちてしまう。顔をおさえ「あなた」と叫ぶと、伊右衛門も慌てて薬を取りに行き「しっかりしろ」と手当てする。と、その場に直助があらわれ「どうなすつた」。やけどと聞いて「あつしのところに良く効く妙薬があるんで」と言つてその場を去る。

場面は変わつて「居酒屋」。伊右衛門がひとり飲んでゐる。直助が「どうなさいやした」——伊右「世話になつた。礼を言うぞ」と杯を向ける。直助は「ご新造さんをどうなさるんで」——伊右「わたしにはどうにもできない」。直助は「いまさら手遅れでずせ」。やけどの薬といつて渡したものがじつはそうでないという。伊右衛門は怒つて掴みかかる。直助は慌てて「おめえさんのためを思つてやったことじゃないか」と二人が揉み合つているところを小平が見ている。伊右衛門がその場を去ると、直助が追い、それを小平が追う。

場面変わつて「伊右衛門宅」。看病に来ているらしい宅悦が飯を食つている。蚊帳の中のお岩が鏡を取つてくださ

いと言う。顔を上げると宅悦がふるえはじめ、「鏡なんかご覧になっちゃいけない」。お岩は蚊帳から出て自分で鏡を見る。「あーっ」と驚き、「顔が、顔が」と言つて床に泣き崩れる。髪をなでると抜けてくる。「髪漉き」の場に似ているが、この部分、お岩の背後から撮っている。恐怖で逃げようとする宅悦をおさえて、「どうしてわたしの顔が」と言うところに、伊右衛門が帰つて来る。宅悦はなおも慌てながら伊右衛門に「お薬が合わないようです。医者へ行つてお薬をもらつてくる」と駆け出す。伊右衛門「岩、どうしたんだ」。お岩は「見ないでください。ついに振り返ると伊右衛門は驚く。「わたしはどうとうこんな顔になってしまいました。どうか見捨てないで下さい」——伊右「なにを言う。薬のためにいつときそうなつてしまったことだ。すぐに治る」。そして「岩、昨日から薬は飲んでないな」と、昨日の毒入りの土鍋から湯呑に震えながら薬を移し、お岩のいる蚊帳に入れ、縁側に向かつてお岩に背を向ける。庭には直助が来ている。お岩が「いただきました」。それを聞いて伊右衛門は逃げ出そうとする。直助が声をかける。伊右衛門はどうしたらいいかわからないといった体でその場でたどおろする。直助が「どうなすつた」と聞くと、震えながら「薬を飲んだ」。家の中を直助が覗く。すこし間があつてお岩の叫び声が聞こえる。「あなたー、苦しい」。伊右衛門はさらに震え続ける。お岩は蚊帳から這い出てきて、立ち上がるが、後ろに倒れ、蚊帳も倒れる。伊右衛門はそこへ駆け寄ろうとするが、直助がそれを止める。その直助の胸倉をつかみ「貴様が岩をあんな姿に」——直助「なにをおっしゃる。殺すつもりで毒を盛つたじゃないか」と、そこに小平があらわれ、家の中を見る。倒れているお岩を見つけ、駆け入り抱き起こして声をかける。お岩「伊右衛門どの」——小平「おまえさんは毒を飲まされたんだ」と直助が「この野郎」とドスで斬りかかる。小平は逃げながら「みんなばらしてやるぞ」。直助「民谷さん。はやく」。伊右衛門は逃げる小平を後ろから一刀にて斬り捨てる。直助「手間をとらせやがつて」。すると、斬つたと思つた小平がお岩を抱いて庭へと出て来て、二人の前を歩き続ける。直助と伊右衛門は、それを幽霊でも見るようにただ茫然と立ち尽くす。と、そこで宅悦の悲鳴が聞こえる。伊右衛門が追う。「薬を持ってただけです」という宅悦に「見たな」と伊右衛門はおどりかかる。二人が揉みあう、その上を二つの火の玉が通りすぎる。



場面は変わって「与茂七宅」。表戸を叩く音がする。お袖が「はい。どなた」。が、こたえがない。お袖が玄関に向かうと、人がいないのに戸がスーッと開く。お袖は「あーっ」と驚いて与茂七に抱きつく、鏡の蓋が落ちる。与茂七が行灯をもつて玄関に向かう。格子を照らすと、そこに「前篇・終」のテロップ。以上で前篇終了。ここまでに八分二十三秒。

以下から後篇となるが、冒頭は前篇の繰り返しが六分四〇秒ほど映し出され、再度、格子を照らしたところで「新釈・四谷怪談後篇」の画面となる。

「前夜の異変を不吉に感じたのか、お袖が「伊右衛門宅」を訪ねる。表戸を叩くが誰も出ない。宅悦が通りかかる。お袖が声をかけると、お岩とそっくりの顔を見てアツと声をあげて驚く。宅悦によると、お岩は家出、それも間男を拵えての駆け落ちで、それに腹を立てた伊右衛門も家を出たそうだという。お袖は「姉さんにかぎってそんなこと」と信じない。前夜、家の戸だけが開いたことを聞くと宅悦はまた震えだし、寒気がすると言つてその場を走り去る。お岩が間男というのは原作にも出てくる口実ではある。宅悦が事情を知つてそれを隠しているということ、お袖に問い詰められるというのも場を変更（原作では三角屋敷）した上で原作を使っている。お袖はもう一度家の周りをみる。閉め切られているが、雨戸が一枚分だけ足りない。

場面変わって「隠亡堀」（か？）、百姓夫婦が畑に戸板を見つけ、「気味が悪いな」とそれを川に流す。戸板には血の痕。ゆっくり流れていく。その川に架かる橋を小平の母おくらが渡る。反対方向から来た馬方が「おくらさんでねえかい」と声をかける。おくらは江戸からの帰りで、小平を探したが無駄足だった、もう生きていないのではないのか、「おらあ、そんな気がする」と言い馬方と別れる。それから歩き始めるが、何かが気になるのか何度か立ち止まつては振り返る。と、川に戸板が浮かんでいる。戸板はそこでぐるっと時計回りに旋回する。裏返るのではない。それを見送り、おくらは一言「小平」とつぶやく。これが戸板返しの変更らしい。

場面変わって、「一文字屋」で、お楨が与茂七と応対している。お楨「これでご婚礼の品もみんな揃いましたよ」というからお梅と伊右衛門の婚礼が執り行われるようだ。お楨の名を呼ぶ者がある。「新吉だよ」と名乗る男（加東

大介)の顔を見てお楨は慌てる。二人は昔の夫婦。新吉は「直助権兵衛という男を探している」と言う。お楨は「あの人はただの直助」だと言ひ、「おまえそいつとできてるんじゃないやねえのか」と問われると、悪びれるでもなく「そうだよ、夫婦約束までした仲だと言う。「だからあの人のまわりうろろするのはやめておくれ」。新吉はさすがに怒る。と、お嬢さんが呼んでいるとほかの女中があらわれ、新吉は「おめえの直助さんよろしく」と去っていく。直助権兵衛とは、原作では薬売りの直助が鰻搔きの権兵衛と名前を変えてのものだが、ここでは「髪結新三」の弥太五郎源七のように二つ名前のヤクザものの名称として用いられている。

場面変わって「与茂七長屋」。与茂七が伊右衛門の居所がわかったと言う。一文字屋に注文の品を持って行ったら祝言の相手の名前が民谷とか伊右衛門とか言っていたと。

「古着屋の前」を通りかかったお袖が以前お岩にやつた着物を見つける。

「町はずれ」で宅悦が直助に金の無心をする。「あれじゃあ安すぎる」というから口止め料をせしめていたらしい。「一文字屋別邸」の庭。伊右衛門を直助が訪ね、宅悦を片付けねばならないと持ちかける。伊右衛門は嫌がるが、直助は「あつしに任せてほしい」。さらに「お願いがある」と一通の書面を出し「これにお名前と判を」。見ると「借用書」で「金三百両」、最後には「直助殿」とある。これを持って一文字屋の旦那のところに行くと言う。伊右衛門が、このために自分を利用したのかと怒ると、あなただってお梅さんとよろしくやつている。それに自分たちは人を二人も殺めている。見つかったら獄門首だ。伊右衛門はそれを聞いて驚愕の表情で「なに、獄門」と、取り乱しあたふたする。直助は「だからわれわれは仲良くしていきなさいねえんで」。

直助が去ったあとに、お梅が来る。お梅は伊右衛門の体の具合を心配している。「せつかく仕官が決まったのに、一度も出仕していない」と。「ほんとうにどうなすったんです」——伊右「うるさい」。

その「庭」で、お楨が直助に「いつ一緒になってくれるんだい」と問い詰めている。「わたしをだましたのかい」。二つのカップルともに以前に比べてうまくいっていない。そこにお梅があらわれ「旦那様がお酒の用意をと言っているから、すぐに」、さらに「直助も一緒にどうぞ」と誘うが、直助は「また出直してまいります」とその場を去る。

ふたたび伊右衛門の部屋。浮かぬ顔で酒を飲む伊右衛門。お槓が三味線を弾きながらうたい、お梅が踊る。曲は「黒髪」。芸者時代を思い起こさせるのか、お梅の顔がお岩に見える。自分の目を疑い、さらに自分の周りを見て、再び顔を上げると、またお岩の顔。脇息を倒して横になると、今度は天井にお岩と小平が見える。立ち上がり駆け出す。心配そうにお梅があとを追う。お槓も何が起こったのかわからないという顔。屋敷中に灯りをともし、庭の灯籠にも火を入れる。お勝手に伊右衛門がいる。

伊右衛門は寝室に戻るとお梅を抱きしめ、「お梅、わしを離さないでくれ」と言うが、自分の手がお梅の髪の毛に触れると、さらにおびえる。お梅は驚く。伊右衛門はその場にならずくまる。「なにをそんなに苦しんでおいでです」。たしかにお梅にとってはなにもわからないだろう。このお梅は原作とは異なり、伊右衛門にお岩という妻があったことを知らない。

場面変わって「居酒屋」。直助が借用書に判をもらったのか広げてほくそえみ、手酌ではじめる。と、店員から「表で誰か呼んでますよ」と言われる。外にはお槓。直助はすらかろうとするが、お槓が追いかけて、橋の上でつかまえて「おまえさん、わたしをおもちやにしたんだね」と問い詰めると、「直助権兵衛といやあ、ちったあ名の知れた悪党だ。ただの植木屋と思ってもらっちゃ……」——お槓「直助権兵衛だつて」。すると「直助権兵衛だ」とそこに新吉があらわれる。「伝馬の牢で仲間を売りやがった裏切者の直助か」。新吉はお槓をつけていたらしい。お槓が手引きしたわけではない。が直助はあやしむ。直助と新吉の二人が立ち回りを始める。橋の下まで降り、二人が揉み合ううち新吉が川に落ちる。

場面変わって「与茂七長屋」、外は雨。目明しの辰五郎が玄関で、「とにかく明日の朝、番所まできて首実検してくれ」。男女の死体があがったという。セリフからはわからないが、どうやら原作の戸板の裏表にお岩と小平を打ち付けるといのはイキにしていたらしい。明日は自分も行きたいとお袖は言うが、与茂七は「やめておけ、ただの体じゃないんだから」と言う。お袖は妊娠している。「もし、それが姉さんだったら、そんな目に合わせるのは、きつと民谷さんだわ。わたしにはわかっている」、一文字屋の娘といっしょになるためにお岩のことが邪魔になって始

末したんだ、とこのお袖は勘がいい。与茂七は「めつたなことを口にするんじゃない」。と、そこへ頬被りした直助があらわれる。商人は商人らしくしていい、空き家を調べたり土左衛門の首実検なんてでしゃばった真似しないほうが身の為だと脅迫してみた口をきく。お袖はなかなか気が強く、つべこべ言われる筋合いはない、「そんなことを言うところを見ると、おまえさんこそ、なにかうしろめたいことでもあるんじゃないか」と言う。直助は「危ない目にあわないうちに、引つ込んでおく方が利口ですぜ」とさらに脅迫めいたことを言つて、その場を去る。

大雨が続き、場面変わつて「一文字屋別邸」。女の悲鳴が聞こえる。お梅がお楨に抱きつき、助けを求め。伊右衛門がまたおかしくなつたらしく手に刀を持っている。それから正気に戻つたのか、お梅に「悪かった。許してくれ」と謝つたあと、お楨の手からお梅を奪い取り連れ出すが、抵抗されよるける。と、縁にはまつていた雨戸が一枚はずれる。それを見て伊右衛門は「ぎゃー」と叫ぶ。

場面変わつて「一文字屋」。喜兵衛の目の前に直助が例の借用書を広げる。三千両という大金に驚き「民谷さまに伺つてみなければ」という喜兵衛に、お岩を離別するときには阿漕なこともしたし、それが表沙汰になればこちらの暖簾にも障るんじゃないかと、直助はやはり強請る気である。そこへ慌てて番頭が入つてくる。お梅とお楨が来ていると言う。喜兵衛は「お梅にはすぐ床をとつて寝かせ、お楨をここへお呼び」と言い、一間に戻つて、直助に「民谷さんが気が触れなすつたというのは本当かい」と尋ねる。直助「えつ、まさか、そんな」。お楨が泣きながら「あの方は恐ろしいお方です。昨夜は夜じゅう、刀を振り回してわめきどおしで……」。直助の顔を見ると、「こいつは悪党です。こいつがなにもかも企んだのです」。直助が掴みかかろうとする。お楨は逃げ、家中のものが集まり、お楨は「こいつだ、こいつが全部やつたんだ」。直助はしようがなく「おぼえてやがれ」とその場を去る。

「隠し堀のほとり」か、橋の上に深編笠の伊右衛門がいる。橋のたもとで小平の母おくらが念仏を唱えている。「居酒屋」。直助がひとり飲んでいるところに、宅悦があらわれ「二人の死骸があがつた。(……)口止め料の割増分はいつもらえるのか」と言う。それは民谷さんからもらうんだ、ついて来いと宅悦を呼んで外へ出る。

「与茂七長屋」の前にお袖とおくらが二人。どうやら男女の死骸の首実検が終わつたらしく、おくらが泣いてい

る。「誰があんなひどい目に合わせたんだ」というおくらにお袖は「わたしは知っているよ。……誰があんなおとなしい気立てのいい姉さんをよくもひどい目に。畜生。おぼえてやがれ」。お袖は家に上がり、着替え始め、「深川にいるその人に会って一言うらみをいつてやる」。そんな悪者のところへ一人で出かけるなんて、それにただの体じゃないのに、とおくらは止めるが、「うちの人はすぐに帰ってくるから。辰五郎親分のところへ寄っているから、おばさんはここに居て」と古着屋から買い取ったらしいお岩が着ていた着物を着て帯を締める。

場面変わって、「町外れの道」を直助と宅悦が歩く。さらに場面戻って、「与茂七宅」でお袖が深川に行ったと与茂七がおくらから聞く。与茂七、すぐに駆け出す。場面戻ると、直助の顔のアップ。「人殺し」の聲が響く。宅悦が逃げ回り、直助はドスで刺す。その横を駕籠が通る。

場面変わって深川の「一文字屋別邸」。お袖が訪ねて来たと聞き伊右衛門は「帰せ、会わぬと申せ」と拒むが、障子に人影が映る。会ってはくれまいと思つたお袖が庭から回って来ている。姉の死骸があがつたことを話し、「帰れ」と怒鳴りつけられても、障子を開けて一間の中に入ってくる。見覚えのある着物を着たお袖は、やはり伊右衛門にはお岩に見えるらしく、おびえはじめ、刀をとって追いかける。お袖は驚いて逃げ出す。追う伊右衛門の目には崩れた顔のお岩が映る。と、今度は逃げだす。そして裏の道に出ると、直助がいる。「直助、岩が出たんだ」。直助は「あなたには困つたもんだ」と呆れ顔で言い、さらに「いま、宅悦を片付けてきたんだ」。

場面また戻って「別邸」。気を失つて暈に倒れたお袖を、助けに来た与茂七が抱き起こし、二人はそこを去る。そこに直助が伊右衛門を伴つてあらわれ、「誰もいないじゃないか（……）それより話がある」。直助は、上方へ高飛びするが、そのために路銀が必要、今夜一文字屋に忍び込んで蔵破りしようと思うから、伊右衛門に中からの手引きを頼むと言う。「自分に泥棒の真似でもさせるのか」と言うかと思えば、「わしを一人にしないでくれ」と相変わらず胆の据わらない伊右衛門が「蔵、蔵と言うが、そんなにたやすくは」と聞くと、直助「蔵破りなら極め付けの名人、直助権兵衛でさあ。これでも、七年前に江戸中の蔵を荒し回ったことがあるんで。武家屋敷の蔵ばかりをね」——伊右「七年前？」。そこで伊右衛門は気が付いた様子。庭に刺さった刀を取り、「それでは貴様だったのか、あ

の藏破りの盜賊は……貴様に藏を荒らされたそのおかげで、わしはお役御免となったのだ——直助「落ち着きなせえつたら。……あつしを斬って、おまえさん一人で逃げられるんですかい。人殺しの兇状持ちになつてですぜ」。

伊右衛門はがつくりうなだれる。まったく情けない侍だ。

場面変わって「街道」を駕籠とともに与茂七が走る。と、川辺に倒れた宅悦が「助けてー」。与茂七が抱き起こす。駕籠からお袖が出てくる。宅悦は「番所へ連れてつてくれ。訴えるんだ。わしは、知ってる」と言う。

「一文字屋」の堀を直助が飛び越える。外にはその後を追う新吉がいる。「お梅の間」にはお榎とお梅の二人。お梅がとにかく怖がつている。「別の間」で、お梅を連れて帰ると言う伊右衛門を喜兵衛が宥めている。そこへ番頭が、「辰五郎親分がみえてます」と呼びにくる。廊下にはすでに直助がいる。伊右衛門は屋敷の中の手引きをする。そのさなかに偶然伊右衛門はお榎と会う、直助が気づいてお榎にドスをむけ「この鍵で藏の戸を開けてくれねえか」。

「別の部屋」では、辰五郎が喜兵衛に事情をすべて話した様子。喜兵衛は民谷伊右衛門が家中にいることを認める。捕手が屋敷を取り巻く。直助はすでにお榎とともに「藏の中」。カメラが移って、伊右衛門はお梅を見つけ出し、抱きつき、「わしといっしょに逃げてくれ。わしはおまえなしでは生きられないんだ」。お梅はいやがる。逃げるお梅がお岩に見える。さらに戻って、藏の中に新吉があらわれ、直助と立ち回りを始める。また戻って、伊右衛門はお梅に「いっしょに逃げてくれ」と懇願している。二人が揉み合ううちに行灯が倒れ、障子に火が移る。さらにカメラは戻り、直助が新吉を刺す。しかし「御用だ！」と捕手がもう出揃っている。家中は大騒ぎ。二階は火が回っている。直助が伊右衛門に逃げるように言うが、伊右衛門はまだお梅を連れ去ろうとしている。そこでお梅が倒れると襖にあたり、顔をおさえて倒れる。やけどしたようである。お岩と同じ顔の右側、これがお岩の祟りということなのだろうか？ 「伊右衛門どのー」という声が聞こえる。なおも、捕手と大立ち回りをする直助。喜兵衛はお梅を探し続ける。煙がだいぶ回ってくる。二階のお梅は畳の上をのた打ち回る。伊右衛門は刀を取り、逃げようとする直助に切りつける。直助は顔の右側を押さえる。これもお岩の祟りか？ さらに追いかける。お榎はお梅の部屋に辿り着きお梅を抱き起こすと、顔がやけどしている。その背後で伊右衛門と直助が立ち回りを続ける。最後に直

助を斬り捨てたあと、伊右衛門も顔の右上部分に怪我を負ったように見える。火の中に、傘張りをするお岩が、さらに廊下に立つお岩が見える。伊右衛門は「岩、岩」と叫ぶ。と、一瞬、場面は変わって桜の舞い散る春の日、伊右衛門とお岩の二人が仲睦まじげに手をつないで歩く。断末魔に伊右衛門の目に映った情景ということだろうか。原作の「夢」の場の改変か？ 場面戻ると、一文字屋はすっかり火に包まれている。

翌朝「一文字屋」の焼け跡の前。野次馬が「これで、一文字屋もおしまいだ」、「あの娘は顔をやけどしてね」などと噂している。その中に与茂七、お袖、おくら。与茂七「姉さんみたいない人がどうしてあんなむごい目にあわなきゃならなかったんだ？」——お袖「人が良すぎたのよ。あんな悪い男にいつまでもくっついていて」——与茂七「小平さんもな」——おくら「でも、これで小平も浮かばれます。ナンマンダブツ、ナンマンダブツ。では、これで帰ります」。二人もその場を立ち去りながら、与茂七「お腹の子にさわるからあんまり考えすぎないほうがいいよ」。お袖はにっこり笑って「おまえさんの子じやないの（大丈夫よ！）」で「終」。

以上、完全なオリジナル脚本と呼ぶべき内容。純粋な「見たまま」記述にもっとも字数と紙数を要した。映画全編を通して怪談の色合いが薄く、お岩の幻影が見えるのは伊右衛門ひとりのようなので、むしろ「神経」、良心の呵責の問題である。悪いのは、だれよりもまず直助、ついでも優柔不断な伊右衛門、それに娘可愛さから妻帯していることを知りながら伊右衛門の世話をする一文字屋だろうか。そのそれぞれがそれなりの罰を受ける。そうした意味で、この世レベルの因果応報の教訓譚となつてはいる。ただし、その罰を下すのがお岩の亡霊かどうかはわからない。最初におかしくなるのは伊右衛門の神経の方だから、その点は結論が出せない。伊右衛門は良心の呵責によって自ら破滅し、関与した一文字屋もそれに巻き込まれてしまったという見方も十分に可能なわけだ。タイトルにある「新釈」とは、どうやらそうした意味のようだ。つまり、お袖の最後のセリフのように「あんな悪い男」と一般に思われている伊右衛門が、もともと善良だったかもしれないが、ただ貧しさゆえに悪巧みに巻き込まれてしまったと言いたいのもかもしれない。あえて「新釈」を謳われると、新奇な視点で描き直すという作り手側の意気込

みを見る側はどうしても期待するわけだが、ここでいう「新釈」とは、いつもの四谷怪談を期待されては困りますというエクスキューズなり、皆さんの知っているものとはちよつと違いますからね、とあらかじめクレームを封じるもののように思われてくる。戦後四年目、上映当時特別な事情があつたこともじゆうぶんに察せられる。が、しかし、「それでも撮りたい」というような内容の映画か、じつさいにこれを見て喜ぶ観客はいたのか、と率直に思つてしまう。だが、やはり時代というものを侮つてはいけない。演劇の「新派」の「どこが新しいんだ？」とか、岡本綺堂や真山青果の「新歌舞伎」の「なにが『新』なの？」というような現代からのもつともな問いは、それ自体演劇史からすれば常識であり滑稽なものであるが、それにしても、その答えを得るためにはやはり時代を知らねばならないわけである。だからこの「新釈」もそれと同質のものと考えるべきなのだろう。時代を侮つてはいけないとは、先の蛭川作を見ても明らかだつた。ああしたものが新しいと思われたかもしれない時代がつい三十年前にあつたかもしれないのだ。それに加えて、南北作品と見なければ、この映画にも見るべきものはあるかもしれない。それだけで蛭川作よりはまだマシである。では、「怪談」でないこの「新釈・四谷怪談」から得られる教訓とは何か？

一、貧乏は人をだめにする。一、人の妻・夫に思いを寄せて付きまとつてはいけない。一、夫婦でも別れるときはすつぱり別れた方が幸せかもしれない。一、直助のような悪い友達と付き合つてはいけない。一、毎日「居酒屋」で飲んでくれてはいけない。そして、一、いつまでもウジウジと思ひ悩んでいると、自分ばかりでなく周りの人間まで不幸にする、ということなどだ。

それでは最後に映画八本分の対照表をあげるとする。まずは次ページがこれまで見た映画の配役表で、公開年順に並べてある。今回見たものはそれぞれ一番古い①と一番新しい⑧となる。なお、「場割」、「殺し」、「モチーフ」の対照表では、今回の二作については本文中に個別にあげなかつたので、それぞれ太字強調をほどこしている。



【配役表】

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
萩原健一	佐藤慶	仲代達也	若山富三郎	天地茂	長谷川一夫	若山富三郎	上原謙	伊右衛門
関根恵子	稲野和子	岡田茉莉子	藤代佳子	若杉嘉津子	中田康子	相馬千恵子	田中絹代	お岩
石橋蓮司	小林正次	中村勘三郎①⑦	近衛十四郎	江見俊太郎	高松英郎	田中春男	瀧澤修	直助
阿藤海	水上保広	矢野宣	伏見扇太郎	┆	鶴見文二	┆	佐田啓二	小平
勝野洋	青山良彦	平幹二郎	澤村訥升⑤	中村竜三郎	林成年	┆	宇野重吉	与茂七
夏目雅子	御影京子	池内淳子	櫻町弘子	北沢典子	浦路洋子	小沢路子	田中絹代	お袖
森下愛子	真砂ちかこ	大空真弓	三原有美子	池内淳子	近藤美恵子	筑紫あけみ	山根壽子	お梅
小倉一郎	澤村宗之助②	三島雅夫	渡辺篤	大友純	東良之助	小倉繁	玉島愛造	宅悦

①木下恵介監督『新釈・四谷怪談』（一九四九、松竹）。以下、②毛利正樹監督『四谷怪談』（一九五六年、新東宝）。若山富三郎がマザコンの伊右衛門を熱演したものの。母親役が飯田蝶子で役名は「お熊」でなく「お槇」。③三隅研次監督『四谷怪談』（一九五九年、大映）では、お梅は流産し子供がなく、家の下男である小平から懸想されている。さらに悪人は直助でお槇とできていて、お梅は喜兵衛の娘との設定。いずれも①を踏襲したものと考えられる。④中川信夫監督『東海道四谷怪談』（一九五九年、新東宝）は紛れもない傑作。ここでも悪人は直助だが、最後に伊右衛門が斬り捨てる。直助の実母が「お槇」。⑤加藤泰監督『怪談お岩の亡霊』（一九六一年、東映）、二度目の若山伊右衛門は辻斬り強盗でサデイステイックな悪人。最後に殺されるのを見てスカツとするというアクション物。ここでもお梅は喜兵衛の娘。⑥豊田四郎監督『四谷怪談』（一九六五年、東京映画）では、比較的原作の事件をイキにしようとの配慮が見られたが、筋を通すため人間関係を図式的に片づけ過ぎて、ドラマとしての盛り上がり欠けた。仲代伊右衛門は劇画の主人公のように決め台詞を気持ちよく言うだけのナルシスト。ただし、「鼠」という原作のモチーフをしっかりと使っていたのは、この映画だけ。⑦森一生監督『四谷怪談 お岩の亡霊』（一九六九年、大映）の、佐藤慶・伊右衛門は迷わず我欲を追求し理路整然と生きるいわば機能美を備えた悪人。歌舞伎で言えば色悪というより実悪の趣。脚本の処理において原作をバサバサとカットし、残した部分の中で整合性を持たせているので、実にすつきり筋が通った。額堂で左門に向かい、「お岩を引き取ってくれ」というのには驚いた。また、結末で悪事に加担した人間が全員例外なく死んでいくというのも、うまく整理ができています。お梅は喜兵衛の娘。そして最後の⑧蟻川幸雄監督『魔性の夏―四谷怪談・より』（一九八一年、松竹）が、以上の諸作品をきちんと参照したかどうか分からない代物だったが、表を見ると「殺し」という事件の方はかなり原作に近いことがわかる。だからこそ、映画として理解できなくなったとも言えるだろう。ちなみに同じ海辺を舞台にした青春群像の映画ならば、現代劇の『八月の濡れた砂』（一九七一年、日活）の方がずっといい。現代に媚びる時代劇というのは、見ていてイタイといふことがよくわかった。最後に、「場割」、「殺し」、「モチーフ」の一覧表をあげる。何かのご参考になれば幸いです。どの表でも、「○」はほぼ原作通り、「―」は完全省略、「△」は改変、「☆」は映画のオリジナルを意味する。

【場割】

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
九五	九三	一〇五	九四	七六	八四	八七	一五八	上映時 間(分)
○	○		○	△	△		△	額堂
○	○	○	○	△	△			宅悦内
○	○	△	○	△		△		裏田圃
○	○	○	○	○	○	○	○	浪宅
○	○	○	○	○	○	○	○	邸 伊藤
△	○	○	○	○	○	○	△	隠亡堀
○	○	○	○	△	○	○	△	屋敷 三角
			△					内 小平
		△	△				△	夢
	○	○	○	○	○	○		蛇山
△	○		○	○				仇討
「海岸」多用	「居酒屋」多用	「居酒屋」多用		「白糸の滝」の場	各場面変更が多い		「居酒屋」多用	備考



【モチーフ】

⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	
	△蛇のみ	△鼠のみ		△蛇のみ	△蛇のみ	△蛇のみ		蛇と鼠
○	○	○	○	○	○十着物	○	着物	櫛
△	○爪剥がし有	○爪剥がし有	○爪剥がし有	○	△		△	蚊帳
△毒のみ	○直助薬売り	△毒のみ	○直助薬売り	○	△毒のみ	△毒のみ	△毒のみ	薬対毒
○	○	○	○	○	○	○	○	貧対富
△片面	○	○	○直助も見る	○宅悦	○	○	△血の痕	戸板
○	○	○	○	○盥に蛇	○	○盥に蛇		盥から手